253
122

始

726

鎌田榮吉著

教育と實業

北文館發行

大正
2. 9. 23
内交

243-122

教育と實業目次

教育篇

第一章　教育問題……一
國民教育に對する希望……一
德育改新論……一五
宗教と教育……四六
國家思想と宗教……六七
硬教育と努力主義……七四
義務教育年限……八四

私學と經世……一〇二
官學私學……一二四
腦充血の國家……一四〇
教育界の未來……一五一
如何にして青年の元氣を恢復す可きか……一五八
學閥大に歡迎すべし……一六四
學生と學校……一六八
圖書館の任務……一七八
第二章　教育と修養……一九五
白と刀……一九五

世人の學ぶ可き福澤先生の文勇……二〇〇
先輩の價値如何……二〇六
キャラクター、メーキングと雄辯……二二〇
言文相近と教育……二三〇
青年と人格修養……二四四
無職に苦しむ學校卒業生は如何にして世に處すべきか……二七〇
活學問は如何にして爲すべき乎……二七二
不合格者安心策……二七七
婦人の地位と其教育……二八五

男女交際論……三〇八

實業篇

第三章　實業と教育……三一九

今後の國力發展策……三一九
現代と積極的方針……三三二
商業道德の改善方法……三四〇
商界革新の一策……三四四
商海の波動と成功の要訣……三五二
邦人海外の活動……三六二
實業と青年……三六七

眞の實業者となれ……三七六
實業家にも授爵すべし……三八五
客引商賣國となす勿れ……三九六
正業と自尊……四〇七
消極論に惑はさるゝ勿れ……四一八

教育と實業目次終

鎌田栄吉著
(慶応義塾)

序

教育と實業とは國家存立の二大要素にして、又其發展の動機となる者である。而して此兩者の間には切るに切られぬ密接なる關係の存するものあつて、恰も花實の根幹に於けるが如く、實業は教育に由て興るのである。然るに今の教育を見るに、當局者其道を誤り、識者を以て任ずる輩も亦徒らに政府者の所爲に阿諂して、之が改善を議策する者なく、殊に實業家に至つては、其實業の教育に負ふ所如何に甚大なるべきかを認識する能はずして爲に却て我商界の進路を阻害するの擧に出づる者比々然らざるはなく、共に吾人の遺憾に堪えざる所である。於茲予は予の持論なる獨立自尊の見地に據りて此教育を論じ、此實業を議する者日として已む所はない。本書は卽ち予が平素の論議の旣に世に公にせられたる

ものを纂輯し、之れに幾分の補修を施して、更らに冊子として、公刊したるものである。若し夫れ此小冊子が幸に世人の注意を惹いて社會進運の一端に貢獻する所あらば余が滿足之れに過ぐるものはない。

大正二年九月

著者識

教育と實業

鎌田榮吉著

教育篇

第一章　教育問題

國民教育に對する希望

元來國民教育とは頗る意味の廣い語にて、學校は僅に其一部分に過ぎない、家庭の教育法、市井の風俗、新聞雜誌、寄席、貸本、繪草紙、流行歌、及び湯屋、理髮店、工場等大凡子女生れて成人する迄の間に、身邊を圍繞する所の事物一として、國民を形成する種子とならぬ者はない、皆國民教育の一部とならざる者はない。先づ假りに之を大別して家庭、社會、學校の三教育と

ても云はんか、而して今世人の所謂國民教育卽ち小學、中學の如き、是等學校の教育法に付て予の平素抱いて居る所を云へば、學校の生徒を兵隊流に仕立てるといふやうなことになつたのは誠に面白くない。それは或程度までは國民教育としては、先づ全體を揃へて一齊の步調を取らせるといふことはやらなければならぬが、併し之は強いて骨を折らなくても自然に出來る、人間と云ふものは模倣的動物であつて、放任して置ても大抵一色になつて了う、極く個人性の甚だしいものだけが飛離れたことをするが、さういふ者は誠に少數で、多數はずつと一列に步く樣になつて居る。無論此の模倣の性質がなければ、國を成すことが出來ないから甚だ大切であるが、これは普通の人間に固有して居ることである。先づ人間社會の出來て居るのは眞似をするといふことゝ、繰返すといふことを始終やつて居るのと、それからもう一つは反對するといふこと、卽ち人と違つたことをするとか、或は以前よりも違つた事をするといふ、此三者が始終働いて居る。而して先づ此の繰返すことゝ眞似をすることが大部分であつて、變つた事をする方は非常に少ないのである。そこで之を個人々々に就て區別すると、卽ち此の反對のことをする人の中で、よい部分は英雄豪傑又はそれ程でなくとも、新機軸を出す方の人になる、又惡い方は變人奇物か甚しきは犯罪人か何かに成るといふやうな次第であるが、社會全體に付て云ふと、此三大勢力が多少の割合を以て働いて居る、又これが總ての人間社會を形成して行く所の勢力となつて居る、所で彼の國風を保つて行くとか、社會の秩序を維持して行くとか、風俗習慣を作つて行くとかいふのは、此繰返す事、眞似をする事といふ方の側にある。無論それがなくては一國民を形成することが出來ぬけれども、それだけでは或程度までは進んでも、その以上には進步が出來ないから、社會が丸で鑄形

に入れられたやうになつて仕舞ふ。それを又折々は破つては進み、破つては進み、一段一段と文明の上階級に昇つて行かうといふには、此の反對力が働らかなくてはならぬ。

然るに現に次代國民を教育する學校のやり方を見るに、總て一ッの模型を作つて、それに嵌め込むやうにして一人が鞭を上げると他も皆それに從つて上げて居る、全國無數の學校の實際を見るに、皆それである。是は兵式的教育法で、國民を皆兵隊の樣にして仕舞ふやり方である、恰かも一つの學級を一個小隊と見、一つの學校を一個大隊の樣に見るのみならず、全國の學校生徒を一大軍旅と見る程のやり方である。故に教場に於ても一ッの學級の一齊を目的としてやつて居るから、假ひ之れで能く秩序が立つた所が唯整然たりと云ふのみであつて一個人の性質とか能力とかを見分けて教育するといふ事には注意が甚だ乏しい、其方の教育は甚だしく不完全である。之を酷に評すれば一山何錢流義の教育法で、盛り方さへ奇麗であれば、個々の桃は腐つて居ても構はないのである。外國でも佛蘭西抔は此風でやつて居る。之に反して英吉利の教育は素より不完全な點が甚だ少からぬ樣に見られても、個人の品性、個人の才能を分別して、その發達すべき所に、發達せしむるの方から云ふと餘程面白い所がある。全體上より見ると比較的揃ひが惡いといふ所はあれども、個人々々の特性を發育して行くことには、餘程都合の宜いやうに出來て居る。尤も英國でも輓近は級別を以て學科を統一するの流義に成つて居る併し今尚或種の學校には、今の流義から云ふと、極く古臭い變則なやうであるけれども、人々の力に依て讀書は讀書、算術は算術と、其學科々々に對する人々の力に依て組を立て、讀書は第一級に學び、算術は第三級に學ぶの類で、其人の各學科に於ける能力に依て組合を立てゝ行くといふの

もあるが、其所等は總て個人の發達を主眼として團體の歩調を第二にして居る者で、其個人の發達の結果は矢張り大體の秩序が却てよく立つて行く譯になつて居る。是は學校のみではない、社會の事が皆此主義に依つて行はれて居るのは、天下に有名な事實である、卽個人の品性が進んで、自尊の精神を生じ、全體の秩序を守る樣になつて居る。然るに近來の英國自由黨政府の政策は社會主義に傾き、百事皆團體主義であるから、遂に此の敎育上の美風までも傷ひはせぬかと思ふ。果して然らば英國の衰運も、之より始まる事であらう。素より之は其國々の國民の性質もあるであらう、又進歩の程度もあるであらうけれども、併し又敎育法から品性に影響して行くことも多いものである。それ故此點は餘程考へなければならぬ。所で日本の敎育法は前述の如く、團體の一齊と云ふ點にのみ着目し、全體を見て個人を見ない、全く見ないと云ふ譯でもないが、見ることが非常に少ない、卽ち前述する所の社會形成力の三勢力中で進歩に必要なる反對力を撲絶して、他の二個の勢力たる眞似をする、繰返すといふ方の性質のみを利用して、之れに引付けやうといふことには骨を折つて居る。その方で行けば學校の規律とか、學校の體面とかいふ點は外面上誠に宜いやうであるが然れども、各個人の固有性を枯渴せしむる次第になる、それではたゞ外面上形式的秩序は立つても、各個人の獨立自尊の品性、卽ち各自が其人格を尊重するの氣風が發育しないから、全體の上にも死したる秩序を保つことは出來ても、潑溂たる活動的勢力を全體に附與する事は出來ない。各人も亦斯る團體的一齊訓練に依て全體の眞利害を利害として、これを行ふ人になれるかと云ふに、夫れもさうはならぬ樣で、寧ろ形式に流れて眞の目的には疎遠になる。それよりも個人の自尊心が發達して居れば、各人の營業等の如き、單に己の利益として爲す所の

もの迄も、國家全體の利益と暗合すると云ふやうになる。此風の性質を作るのが、卽ち教育の目的とならなければならぬ。必ずしも一つ一つ之は國家の爲とか、之は社會の爲とか意識する程の事ではなく、日常の小事を行ふにも、知らず識らず帝の則に順ふと云ふ樣な工合になり、自家生存の爲めに營む事が、自然に社會の利益にもなるといふやうな性質を作るのが、之が國民教育の目的でなければならぬ。

要するに自己直接の利害と、社會の利害を合一せしむるといふ所に、人の心を向けるのが、國民教育の目的でなければならぬ。所が今日やつて居ることは、どうも唯々一生の中に有るか無いか分らぬような危機に對して、人の取るべき方針を教ふるのみである。是も甚だ大切であるが、日々夜々人生に附隨する所の處世方針に就ては甚だ等閑に附せられてある、換言せば其常性たる人格を形作る所の教育がないと思はれる。是ては案外に其効能が薄い。尤も學校のみではない、他に行政上の缺陷も大に與つて居る、それは形式則ち手續上の事が非常にやかましいことである。嘗て某教育家の話を聞いたが、遺失物が途中にあつたならば、それを拾つて學校へ持つて來て、屆けるやうにと言つて置いた所が、生徒が中々澤山途中で物を拾つて來る、そこでそれを一々警察に屆けなければならぬと云ふので、學校の役員が非常に面倒なため、それを又た廢めやうとして、今度は拾つて來てはならぬといふやうな布告を出したと云ふことであるが、之れがどうも面白くない。途中に物が落ちて居たら、自分の者でなくても、之れを拾つて學校に持つて來なければならぬと云ふ事は當り前の事で、他人の物だから落ちてあつても構はないといふ譯はない。所が日本の行政の仕組が甚だ惡く、こんなことにゑらい面倒な手續きを要求する所からして、學校の方でも落ちて居ても拾つて來てはならぬと、朝令暮改の

事をするに至つた。此の如き繁文を廢して、學校でも物を拾はせて學校が直に其遺失人に渡してやつても宜いではないか。落し主は警察及び學校へ聞きに行けと言つても宜い譯だ、其實は子供が自分の關係のない事は構はないと云ふ如き冷淡な風でなく、他人の爲にやるといふ良習慣を附けるのが公德教育である、唯修身書の講義ばかりではいかぬ。要するに社會の利益に貢獻するといふ性質を造り、自己の利益と公共の利益を一致せしむるといふ樣にするのが、國民教育の目的でなければならぬ、孔子の己れの欲する所に隨て則を超へず、と云ふ所を理想としたいものである。

此方の教育が缺けて居るためか、今の日本人の缺陷として數ふべき事は多いが、一例を擧げていふと、家々に電燈を點ける、其中に終夜燈と半夜燈と、それからメートルの分があるとすれば、メートルの方は用が濟むと直ぐ消すが、終夜燈や半夜燈はどつちにしても錢を拂ふから電燈の要らない時でも消さない人が多い、之が日本人の頭にある缺陷である。會社の方にも不埒な點は數々あるが、それはそれとして終燈夜でも要らない場合は消して置けば宜い、それは直接に自分に損は懸らないようだが、小にしては會社が損をし、大にしては國が損をして居る。成程會社は取る者は取つて損はしない、勘定は立て行くのであるから、夫れ迄にして何にも市や會社のために盡してやるには及ばぬといふ樣に考へるだらうが、詰り國の損でもあり、市や會社の損でもあり、又自分の損にもなる。何故なれば若し各自が終夜燈や半夜燈であつても、儉約して使ふやうにして其一面には市や會社に迫つて段々電燈料を下げさせる、會社がまたそれを下げなければ他の競爭が起る、若し電燈が獨占であるならば、瓦斯が競爭する、燈油も競爭する、兎に角天物を空費するは國の損になる、國の損に

なる事は自分の損にもなると云ふ事は明白である。此種類の事に就ては政府のして居る事抔は最も甚だしい、政府の部分が統一して居ないために、同じ事を各省が各自別々にやる、政府全體で一つで濟む事を、三ヶ所四ヶ所でやつて居る、又官民一ヶ所で濟む事を、官と民とで分けるといふやうなことが、夥くあると云ふことは、之は著しく吾々の眼に映ずることである。國家を代表する政府が最も國家に不親切なる標本である。行政整理の目的は主として茲にある。此弊風こそ打破すべきとであるが容易に行はれないのは矢張り同一の原因である。例へば予が嘗て支那で見たことだが、南滿に於ける行政の如き、南滿鐵道會社が一通りの行政を行ふて居る其の上に、關東都督府があつて、又領事館がある、其結果として事務が澁滯し、經費が倍する、而かも殖民は此官衙の用を足すのが目的となつて居る、官吏の爲めに宿屋や料理屋を開くのが第一で、實業の爲めの眞の殖民は甚だ少ない、內地の資本家が臆病で、事業の經營が頗る鈍いのは歎息の至である。李鴻章が曾て日本の某大臣に向て、御請求通り各港に日本租界も出來ましたが草原の中で犬が子を生んで居るのみで、貴國の人間は一向住みません、と云はれたそうだが、今日でも某々開港場の居留地の如き、其通りである、唯日本守備兵が居るとか、日本の役所のあるが爲めに人間が居る、矢張官的殖民で民的殖民でない場所が多い。

要するに從來鎖國の國是に養はれた上に、形式的教育を以て元氣の發達を阻止せられ、何もかも官府萬能主義に中毒せられて居るから、獨創獨營の勇氣に乏しく思ふように發展しない。官民共にこんなことをやつて居る結果で日本は貧乏して居る。隨て諸般の事も進まない。此等の弊風を矯めて行かう、我國民教育をして一層實際的のものにしやうと云ふのには、今日の樣な形式一遍そら念佛の教育では何にもならぬ。

猶一つ支那に於て見聞したことに就て云へば、彼の科擧の一事である即ち試驗を以て官吏の候補を定め、進士とか擧人とか云ふ學位を與へる事は人の能く知る所であつて、又先年變法自强の主旨を以て、清朝は之を廢止した事も人の能く知る所であるが、予は南京に於て其試驗所即ち貢院を一見して驚いた。其內部の構造は中央に高い三層樓が立つて居る、之が監督所で、其より八方に擴がつて馬繫ぎの樣な長屋が畑のうねの樣に百棟も立並んで居る、其一棟は百室に區分され、其一室が方四尺位いの廣さである、即ち都合一萬室と稱されて居る。受驗者は此一室に九日間籠居して試文に應ずる、其間は一歩も外出は出來ない、飲食も大小便も其儘であるとは實に驚く外はない。併し今日は流石の支那でさへ之が廢されたのであるが、却て我日本こそ益々試驗萬能の弊に陷つて、毫も青年の頭腦の活動を許さない、唯從來の如き彼の模倣性、繰返性の二つのみに訴へる所の消極的教育法を改めて、大に反對性を活用して個人の特性を涵養し、獨立自尊の氣風を旺盛ならしむるの覺悟がなくては、到底天下に雄飛する所の進歩的國民となることは望まれない、余の國民教育に就て持つ所の希望はこれである。

德育改進論

德育の論は近來益々盛んになつて誠に喜ばしいことである。能く人が維新以來の教育は智育に偏して、德育に薄いといふ樣な事を云ふが、成程幾分かさういふ意味もあるかと思ふ。それは先づ維新前の教育と云へば主として德育である、智育もあるけれども、先づ德育體育を重んじて、智育といふことに就ては餘程少なかつたといふのは、今日の樣な科學的の智識といふものを教ゆることがない、又數學の如きも教へられたけれ

ども、比較的に疎せられて居るといふ樣な時代であつたから、それから、比較すると、維新前よりは今日は智育の方に偏して德育に薄くなつたといふ言葉は强ち無理でない。併し乍ら其の德育なるものは如何なる倫理、如何なる道德の主義に依て之れを爲すか、又如何なる方法に依つて之れを爲すかといふと、其主義の異同はさて置いて、方法に就ても頗る其當を得ないことがある。

全國の中小學にも色々ある。然れども概して劃一に此各中、小學が同じ方法を以て德育せられて居る。其方法たるや餘り面白くない、道德といふ者はこれは實踐すべき者である、道德はアートである、決して學問でない、人が身に之れを行ふて、始めて道德の意味を爲すのであるから、是非これは實踐躬行しなければならぬ。如何なる尊い敎でも唯口に之を講じて、耳に之を受取つたのでは何の効もない、假令ひ言はずとも其感化を受け、それが爲に德性が修養せられて行つたならば、假令一言の言葉を發せずと雖も、所謂不言實行で、千萬言を費やすよりも遙に効は多い。所が今日の德育は重もに口の道德である、身に之を行ふことは責めない、又之を責めた所が、只形式的に責めるので、其人の精神を感化し、其人の中心に向つて夫を浸込ますといふことは甚だ覺束ない。尤も色々困難な事情もある。多數の人を一時に集めて、茲に之を個々に責めるといふことは六ケしいといふ道辭がないともない。如何にも其說も立つべけれども、又一方より言へば、多數の人が一つの學校に集つて居るが爲めに、其の多數の人に向つて多數の感化を及ぼすことが出來、一人の爲すことは萬人之れを學ぶことが出來、一學校の學風、一學校の氣風が善い方に向つたならば、其學校に居る人々は皆其感化を受くる譯であるから、人が多いから個々に向つて實踐躬行を責めることは出來ぬといふ道辭は、これは通用

しない。なる程或る學校に對しては、現在行ふ所に向つては少しく衝突するかも知れないけれども、今の有樣は先づ學校の校長、教員其他の當局者と生徒との間は、恰も政府と人民といふ關係になつて居りはせぬかと予は思ふ。其政府といふものも決してやさしい政府でなく、恰も專制政府である、生徒は專制治下の人民である、之に依らしむ可し、之を知らしむ可らずといふ方の流義で、唯命令的に多數の人を制馭しようと云ふのである。而して僅に一校内の治安を保つことを得たものが、恰かも德育を施し得たりとして居るが如き缺點がありはせぬか、斯る流義を眞に心服して、能く夫を奉體することが出來るか、或はさういふ譯には行かぬであらう。それに向つて若し抗議を言ふならば、其人は甚だ穩かならぬ、宜しくない者であるといふ譯だから、所謂外面では誠に結構であるとして、先づ御無理御尤と言つて居る、然れども内心は夫を嘲つて居る風がありはしないか、即ち面從腹非といふことが現にあるだらうと思ふ。面從腹非といふことと程道德上惡いことはない、若し德育の方法を誤つたが爲に、面從腹非を、造つたならば、其德育なるものは決して眞の德育でないのみならず、德育の趣意に全く反對したことで、これは非常に忌むべきことである。國民擧つて面從腹非となつたならば、其國の根底は既に倒れて居る、これ程怖ろしいことはない。即ち面從腹非の國民が出來たならば、其國は倒れるといふことは支那の歷史に徵しても朝鮮の歷史に徵しても、西洋の歷史に徵しても、又東洋各國の興亡の有樣に徵しても分ることである。既に國の根底といふものはそれが爲に腐つて居る、斯の如き有樣になつたならば大變なことである。予の希望する所は先づ德育の主義は一ならずとした所で、其方法はさういふ面從腹非といふ結果にならない樣に、眞に直情徑行で口に言ふ所のもの心に之を信ずる、又心に信ずる所のものは身

に之を行ふといふように、口と心と手とが三ッ一致する樣にしなければならない。又さうなる樣に敎へなければならない。今日德育といふことは廣い言葉であるが、學校の道德といふ範圍で云ふならば、今の樣に警察官と人民との關係の如く、叱られるが怖いから言ふことを聞いて居るといふ樣では甚だ賴母しくない。

それには先づ學校で云へば、敎師と生徒の間に設けてある墻壁を取て仕舞まつて、兩方が互に接近し、互に融和して學問上は無論の事、互に遊戲談笑もすれば、運動競技もする、老人が子供と一所になる譯にはいかぬけれども、能く靑年に同情して老人も子供の心を知り、子供も老人の心を知る樣に互に親炙してやつて行かなければ、迚も感化すると云ふ譯にはいかぬ。能く人は師道が衰へたといふことを言ふ、支那では能くそんなことを言ふが、今日の日本の如きは師道の最も衰へた時である、どうかして師道を盛にしなければならぬ、師道を回復しなければならぬ、と論ずる其人達の意味を翫味して見ると、中には面白いこともある。併し乍ら嚴格に、三尺下つて師の影を踐まず、といふことの意味で以て師道を說くといふことに至つたならば、是も餘り芳ばしいものではない。予の所謂師道の回復は今日の師弟の關係をモッと密接せしめて、互に能く同情の通ふ樣にしたいと云ふのである。且其感化力を體育上にも、又智育上にも應用したい、體育と智育と德育とは分離した者でない。卽ち例へば科學を學べば知識が起つて來なければならぬ、ところで此科學は欺かない、數學は欺かぬ、二と二を寄せれば四になるといふことは、千年前も今日も變らぬ、酸素と水素と合すれば水になるといふことは、天下の何處にでも行はれて居ることである。故に科學といふものは智育であるが、其の智育を能く味はつて行けば、之れを德育に應用して立派な敎訓になる、智育だの

德育だの體育だのといふことは、便利上から之を分離して居るが、其實は一つであり、又同じものである。

又此節頻に體育上の競技が流行して居るが、これも德育といふ主義でやつてこそ役に立つ、無論身體を强壯にするとか或は擧動を鋭敏にすると云ことが主なる目的であるけれども、それに依て其德性を養ふといふことで、ベースボールも役に立てば、フートボールも役に立つ、船を漕ぐのも役に立つ。例へば團體を以て團體に當る時には、自己の利害を顧みずして團體の爲に盡し、團體の爲には自己を犧牲にするといふことは、今日の競技の中に行はれて居る、或は又卑劣なる行爲をして敵に勝つとも役に立たぬ、總て熱誠を以て事に當るのが大切であるといふ樣なことが、皆競技の中にある、それは予がいふ迄もなく、世間の善く知る所である。夫から又オーソリチーを尊ぶ、權威に服從するといふことも必要である、是は

威服ではない心服である、審判者を設けて其審判者の審判に服從する、假令ひ不利なる審判であらうとも、審判者の審判に服從するといふのは盲從ではない、自分達が審判者として一度び此人に事を委托した以上は、夫に服從するのは當然の話である。此精神を養つて置くと、是が社會に出たときに色々社會の治安を保つ上にも、社會の進歩を爲す上にも役に立つ。先年民法の中に、本裁判にならぬ內に仲裁を以て解決するといふ道が立つた、それで或る二つの會社に或る紛議を生じた時に、公平と信ず可き所のある先輩を擧げて仲裁を依賴した。予は其時にどうかうまく行つて貰ひたい、若し仲裁といふことによつて、成るべく紛議が解決されることになつたならば社會の爲に非常な幸福なことゝ思つて、其事の首尾能く行はれることを希望して居つたのである。然るに一方の不利な側の方から異存を申立つて、遂ひ其仲裁といふことが効を爲さなかつた、こ

れ抔は非常に慨嘆すべきことで國民の恥づ可きことである。

何故にさういふ結果になるかと言へば、卽ち學校に於て審判を尊重するといふ精神を養ふて居らぬから社會に於てもさういふ樣な不結果になる。能く此の競技等の場合に審判を尊重すべきものであるといふことが十分に腹に這入つて居つたならば、社會に出て其人がさういふ恥かしい擧動は出來ない。兎角自分の都合の宜い時には其通りやるけれども、都合の惡い時にはそれを逃げるといふ樣な面白くない結果になる。これは體育の能く行はれ、競技が十分德育に應用されて居る社會に行くと、決して學校の子供の間の遊びといふ斗りでなくて、他日は政治上にも法律上にも又社交上にも其事が効能を顯して、立派な風を爲して居るといふことは實際である。これ等は皆德育の方法であつて、どうぞ中學校に於ても、小學校に於ても、德育の方法といふものは兎に角面從腹非といふ結果に陷ることでは面白くないから、モウ一層之を進めて眞に其事を信じ、信ずるのみならず其事を行ふといふ良い風を養ふ樣に致したいものだと希望する。

それには次に道德の敎旨として敎へられて居る所の忠孝、此忠孝の大道なるものは千萬年後と雖も變らぬであらうと思ふが、要するに此の忠と云ひ或は孝といふことの其意義を明にし、眞の忠はどこにある、眞の孝はどこにある、又野蠻時代の孝、野蠻時代の忠を今日の文明社會に其儘に丸呑に行つて、果して効を爲すものであるや否やといふことを考へなければならぬ。人間がまだ野蠻で蠻性を脫しないといふ時代には、單純なる忠孝といふことを以て社會を律し、家庭を治めるといふことにならなくてはならぬ。併し乍ら社會が段々進歩して、複雜になつて來て居る今日には、大本たる道に於ては何等の相違はないが、之を實行する上に於て

は種々變つて來なければならぬ。例へば公德と、私德の樣なもので德に公私はない、公德は私德になり、私德は公德になるのであるが、說明をしたり敎育をしたりする便宜上公私と二つに分けて居る、日本で分けるのみならず、支那で分けるのみならず、西洋も之を分けて考へる。

先づ忠孝で言へば第一忠といふものはこれが公德であり、次に孝といふものは私德であると考へる。社會に盡すのが公德である、一身一家に盡し、或は朋友間に盡すのがこれが私德である、然らば則己の父母に對する所の義務が私德の中では最も大事で、又公共の上では自分の君國に對して盡す所の道が最も大切である、此は代表的の言葉で卽ち公德は忠に依つて代表せられ、私德は孝に依つて代表せられるといふことに考へなければならぬ。然らば今日の此大なる國家の君主に對して盡す忠道といふものを、未開時代の或極めて小なる團體が其會長に對して盡す樣な單純な忠を以て、又或る未開なる所の家庭に於て其父母に對して盡す樣な孝道を以て之を表彰して行くと云ふことは不都合であるといふことは誰も知らぬ者はない。例へば今義士銘々傳といふものが大層流行して居る、これも至極結構なことである。演劇を見ても赤垣源藏といふ者は非常に面白い。其赤垣源藏の忠義はあの時代に在つては大變な忠義で、今日の文明の社會に於てもあの忠義の精神は宜しいけれども、あの忠義の實行をあの儘に繰返したならば、雷に忠道に叶はざるのみならず、非常に不忠な人とならなければならぬ。これは決して赤垣源藏を責めるのでない、赤垣源藏は其時に於ける最も良い忠義をやつたが、今日の社會に於て、若し赤垣を學ぶ心であの通りの事を行ふ人があつたならば、これは赤垣源藏其人の志を知らぬものと言はなければならぬ。それも或る種類の個人々々に付ては又さういふ必要な場合もあるけれども全體の

國民を律するといふ、小學とか中學といふ一般の國民の教育を爲すといふ場合に於て、千萬人の一人が偶々國家非常の時に當つて爲したことを繰返して、其が忠義になると思ふと非常な間違ひである。先づ今日の社會に於ては如何なることが忠義で、如何なることが公德であるかと言へば、卽ち上は帝室の尊榮を祈ることであるが其帝室の尊榮を祈るといふことは、如何にしてよろしきやといふことを考へなければならぬ。唯無暗に忠義の名を叫んだからと言つて帝室の尊榮を增すことは出來ぬ。國家の元氣富强といふことが本になる。帝室の尊榮を增し奉らんとするには、國家の富强を圖らなければならぬ、國家の文明の進步を圖らなければならぬ。然らば成る可く根底から國家の富强を增し國家の文明を進めて帝室の光輝を發揮するといふことが眞の忠である。然らば君主に盡す道も國家に盡す所の道も一つの公德である。而して之が實現の道如何と言へば、戰時に當つては生命を拋つて盡し、平時に當つては各自の職務に忠實にして、自己の營む所のものを一生懸命に盡さなければならぬ、又國家に對し社會に對する義務を同時に盡さなければならぬ。これが若し赤垣源藏の流儀でやつたら如何、卽ち平生は大酒を飲み、さうして赤合羽を着て貧乏德利を提げてブラ〳〵して居る、自分の兄きの家に行つては厄介になつて、下駄に灸を据へられて、箸を立てられる。それは後から銘々傳て聞くと非常に面白いけれども、若し總ての人があゝいふ風に、マサカの時にはやる、平生は何もせぬ、斯ういふことであつたならば、國家はどうなるかといふと、必ず國家は衰亡に傾く、國民が悉く酒を飲んでブラ附いてゝもマサカの時にはやるぞと言つたならば、大變な不忠極つた事、公德を破る事最も甚しいことになる。其の結果より考へて見れば、文明の今日に於て、普通の教育に依て德育を爲し、德育を施すといふ立場から其利害を

能く考査すれば勿論のこと、あれをあのまゝ今日やつたならば怪しからぬ不忠になるとふことといは、三歳の童子と雖も能く分る。

又家庭に於ける私德の點に就て云ふも、予がいふ迄も無く古い流儀の孝行を其儘行ふて、例へば父母在せば遠く遊ばずて、兎角學生抔が學校を卒業して就職難に困つて居る。北海道に仕事があるが行かぬか、北海道は眞平御免だ、樺太はどうだ、樺太も御免だ、どうか東京に何かすることはないか、東京でなくても何處でも宜いではないか、私は宜しいが私の老母が遠くへ行くことを好まぬからといふことを能く云ふのである、これ抔は惡い心でないか知らぬが、所謂古い孝行を考へて居る。それで支那人が日清戰爭の當時に金州の門を締めた時に、私に老母があります、私には老父がありますと言つてみんな逃げ出したとか、這入つたとかいふ話がある。餘所ごとでない日本人の孝行は宜しいが、併し支那人的の孝行は餘り賞めたことでない。總てのこと然り忠義と言へば從僕がその主人に對する所の小忠に對することを言ひ、孝行と言へば氷の上に寢て鯉を取て自分の親に獻ずるような小孝行を考へて居るが、夫は間違つて居る。それは單純なる社會にてはそういふことで濟んだが、今日はさういふことでは忠にも孝にもならぬのであるから、これは敎へる人も學ぶ人も能く考へなければならぬ、又眞に君國の爲に盡し、父母の爲に盡さんとする者も大に考へなければならぬ、それを考へたならば、其結果は必ず國も盛え家も榮えるといふことになつてくると思ふ。

併しそれには犧牲の精神の本となる所のものがなければならぬと思ふ、故に予は獨立の精神を養ひ、自尊の氣風を造れといふことを常に勸めて居る。此の獨立自尊といふことを直に役人にならないで、商賣で飯を喰ふことゝ解釋するものもある、それも或る場合には獨立自尊か知らぬが、

そんな狹い意味のことでない。人に依ては役人になるも宜い、人に依ては商賣人になるも宜い、人に依て方向は違う。或人は役人にならないことを以て自分の境遇から獨立自尊と考へた人もある、或人は商賣することを以て獨立自尊と考へた者もある、併し乍らこれは元精神の修養卽ち人格を造るといふ爲に言ふことであつて、人格を造らなければならぬ、人格を造つて品性を陶冶する。それは誰がどういふ考、誰がどういふ主義を持たうとも、精神の獨立といふことがなければならぬ、又己を尊敬するといふことがなければならぬ。卽ち己を尊敬するといふのも、能く人が誤解するが如く、只威張るといふことでない、只自己を豪いと思つて自尊傲大にするといふことでなくして、自己の品性を尊重し、自己の人格を尊敬するといふことであるから、己の人格を尊敬する以上は決して賤しいと卑劣なこと、又詐僞的のことは出來ない。自己の人格を尊敬しない人に向つて貴樣は忠臣である、貴樣は孝子である、貴樣は善い人であると言つて見た所が、これは無意味である、如何となれば己に對する責任、己を尊ぶ所の精神といふものがなかつたならば、これは誠に空漠たるものである。併し乍ら東洋古來の敎といふものは、兎角他を尊ぶといふことになつて、己を尊敬し、己の品性を尊敬し、己の人格を敬まうといふことが少しも敎へられて居らぬ、これが古來の道德の缺點である。昔の時代にはさうなければならぬが今日の時代には合はぬ、只主人に忠、親に孝といふ計りの對他的道德であつて、若し其人に主人がなければ忠はなくなる、其人に親がなかつたならば孝がなくなる、其人に夫がなかつたならば操といふものがなくなる、つまり他に所謂對象物がなかつたならば、其人は無道德になる、そんな理窟はない。對象物があつて始て起るのでなくて、自己といふ者が存在する以上は、人に德義が備つて居なければならぬ、人に德義がなけ

れば人てないといふことになる、それは何てあるか自尊といふことてある。

極簡易な話てあるが、予は幼少の時に楊震四知の敎と云ふ話を聞いた、夫れはどういふことかと言へば、例へば予と他の一人とが惡い事をする、さうすると之は他に誰も居ない、暗夜に二人て惡事を相談したら善さそうなものてあるけれども、さうはいかぬ、何せさうはいかぬかと言へば四つ知つて居る者がある、天知る地知る人知る我知る、天が知り地が知り汝が知り私が知る、だからいかぬといふ、斯ういふ話を聞いて今でも予の耳の底に殘つて居るが、之を今日解剖して見ると、所謂天知る地知るは天神地祇の罰を怖れる、天地の神の罰を怖れて惡事を爲さぬといふことてある。之を概括的に言ふと、宗敎的制裁といふ者が其人の惡事を戒しめることてある、又人知るといふことは、既に二人が知れば二人知り三人知り終に多數人が知り、社會的制裁卽ち、輿論の制裁を受くることになつてくる。それから我知るといふことは、自分の惡いことを自分が知り、卽ち自分の非を自ら知て之を自ら誹り、自分の善いことを知て自ら之を賞して、自己が自己に對する賞罰を爲す。これは道德上にも最も必要てあつて、宗敎上の制裁、輿論の制裁、自己の制裁といふことは必要てある。此四知の敎はよく翫味して見ると非常に面白い。併し宗敎的制裁は其人に宗敎上の信仰があつて始めて役に立つ、輿論の制裁といふことも亦世間の毀譽褒貶を怖れるといふことがあつて始めて役に立つ、併しながら如何に宗敎に冷淡で、且つ世間の譏譽に無頓着な人でも、自己が自己の考を忘れることはない、自分が爲したことを自分が知らぬことはない。自分の爲したことは自分て知る、其知る所の己がその己に對しては、實に全智全能の神と言つて宜い。此全智全能の己に對する考が一番強い制裁になる。總て己を尊ぶ、其尊ぶ己に支配されて居るといふことが一番安全な方法てある。

苟も自分を以て明鏡の如く、自分を以て金玉の如くし、自分の品性を尊び、自分の人格を重んずると玉の如く、鏡の如くにしたならば、其鏡面に疵を附けることは惜くて出來ないであらう。其明玉に向つて一の汚點を染むることはどうしても惜くて出來ない。然らば此自分の品性を尊重するといふことが最も確實な保障である。其上に他の保障を持つて居れば尙ほ結構であるが、その根底は獨立自尊でなくてはならぬ。その確實なる人格を造るのが德育の目的である、これが日本にうまく行つて居らぬ。學校も社會も喧ましくは言つて居るが、只形式丈けで本當に行はれないといふのは、自尊といふことに根底を置かないで、古い所の教義を繰返して居るから、馬耳東風に聞流されて居るのである。

そこで此節又色々社會に說が起つて、社會主義とか、或は個人主義とか、國家主義であるとか、團體主義であるとか、自由主義であるとか云ふて、其實、どちらが善くてどちらが惡いか大に迷ふ人がある。予の考では、先づ社會主義と云ひ、個人主義といふ者はさう性質上違つた者ではないだらう、只同物の表裏の相違に過ぎない、詰り集合の力を以て國を善くしやうといふのが卽ち社會主義、團體主義、國家主義である、又個人を善くして國を善くしやう、社會を善くしやうといふのが個人主義と、斯ういふ樣に解すれば宜いと思ふ。個人を手段と考へ社會を目的と考へた者は社會主義、社會を手段と考へ個人を目的と考へた者は個人主義であるが、結局世の中が善くなれば宜い。所が個人主義が兎角惡い結果を生ずる、又社會主義が惡い結果を生ずるといふのは何かと言へば、人に自尊の精神が具備しないからである、苟くも之がない以上は、どちらの主義で行つても世の中は惡くなる。今例へば自尊心のないのに、社會主義の最も極端なるものが人の私有財產を認めないといふことになるとどうであらう。人

が同じ樣に働いて、同じ樣に分配されることが出來れば公平だが、中々さうはいかぬ、惰け者もあれば働く者もある、慾張る者もあれば無慾の者もある、これはどうしても自己を尊んで、如何に自分の力があつても、己の人格に對して恥かしいことをしないといふ其の精神がなかつたならば、理想は如何に善くても迚も行はれるものでない。之に反して個人主義が行はれ、個人が各自勝手に働き、各々自由競爭で以てやつて行くといふやうに、此社會が理想通りになつた時にも、若し各自に己を尊ぶ所の自尊的精神がなかつたならば、社會は弱肉强食になつて仕舞ふ。故に斯る社會には自己の自由を重んずると共に人の自由を重んじなければならぬ、只力任せに人の領域を犯してはならぬ、外部に之を禁ずる者がない時は、之を制するものは自己の德性である、自己の良心の許さぬ事は敢て爲さぬといふ心があつたならば、始めて之を爲すことが出來る。假に極端なる場合を想像して、各個人に自尊の精神、獨立の精神がなかつたとすれば社會主義も個人主義も共に惡いのである。

兩主義共に一面の眞理はあるが、極端になれば惡くなる。それで中庸平均といふことが大切で、バランスを失へば如何なるものも惡くなる。元來善惡といふことはそれから起る、例へば節儉と吝嗇、節儉は誰が見ても善いことであるが過ぐれば吝嗇を生ずる、吝嗇となると惡い。吝嗇といふのは只無暗に貪つて、少しも社會の爲めに財を利用せぬ、自ら貪つてそれを喜んで居るといふことであるからいけない、又その反對に奢侈も惡い吝嗇と一樣に同じく惡い。故に吝嗇に陷らず、奢侈に流れずと云ふ所が卽ち節儉である。欲望が度を過ぎれば奢侈か吝嗇になる、それを制するのが獨立の精神である。自己の慾に耽つて吝嗇に陷り、又奢侈に流れるといふことはいけないから、その中正を守るといふことは獨立の精

神がなければ出來ぬことで、どうかすると無暗に放蕩者にまつたかと思ふと、どうかすると無暗にケチン坊になるといふのは、理性的に自己を以て自己を制する所の力の乏しいことから起つてくるのではないかと考へる。これは只一例に過きぬが、さういふ風に例を擧げたならば無數の例が擧るだらうと思ふ。結局今の德育なるものは極端に馳せて仕舞つて中正を得ない、卽ち今の喩の如くに奢侈も惡ければ、吝嗇も惡いといふが如く、如何なることでも只極端になつてはいかぬ。忠義といふことは大切なことであるが、忠義に或る狹い解釋をしてそれが爲に人を殺し、それが爲に泥坊をするといふことがあつたならば、何の役にも立たぬ。孝といふ事は大切なことであるが、狹い解釋をして自分の子を殺して親に盡す、人を殺して親に貢ぐといふことは不孝の甚しきものである。その宜しきを得るには、自己を中心として自己の品性を尊敬し、自己の人格を磨いて行くことが大切である。

成功といふことを能く言ふが、金を貯めて自働車に乘つたのは成功ではない、或は酒池肉林の快樂を貪り妻妾を蓄へて、丁度山賊が自分の洞穴の中に巢を造つて、澤山御馳走を持ち來り澤山美人を連れて來て、さうして大江山の樣なことをやつて居るのを之を名づけて成功とは言へぬ。人は生れて智德體の性を受けて、之を及ぶ丈け發達して行かなければならぬ。親は豪い者に違ひない、先祖は豪い者に違ひない、其の豪い親、豪い先祖よりも豪くなつて、智德體の性を改良して之を後昆に傳へる爲に、己の子孫を又一層善くして行くといふので、始めて此社會といふものは進歩する、先祖が豪いと言つて先祖以上に出なかつたならば社會は進歩しない、先祖を尊ぶといふと、先輩を尊ぶといふとも必要であるが、それよりモウ一歩大いなる考がなければならぬ。子孫は先祖よりも豪くなると

いふとは先祖に對する義務、又青年が先輩よりもよくなると云ふ事は先輩に對する德義である。世の中の進まない、變化しない時代に於てはそれは先祖が一番豪い、又老人が一番豪い、何せかと言へば昔は總ての人間の知識は口傳的である、口から耳に傳へて來て居る、歴史と言つた所が口傳である、此の先例古格とか、古格古式とかいふ事柄は最も古い社會には大切だが、夫は老人が知つて居る、婚禮の時の三々九度とか、御神酒を上げる時は拍手を幾つ拍つとかそれは老人が知て居る。夫れ以上の事も無論老人に聞く外はない、故に自然と老人に尊敬を拂ひ、老人を崇拜するといふことになる。之は誠に宜しいとて、老人を劬はり、老人を尊ぶといふことは宜いが、若し之を尊ぶ丈けで老人以上に出なかつたらば其社會は進まぬ、進まぬのみならず衰へる、或は亡びる。文明の社會は口傳でない、文明の社會は論說をなし、文章を書く、其上活版といふものが進んで來た、速記

といふことが進んで來た、知識は容易に傳はる、今日の中學生徒は孔子よりも餘計に物を知つて居る、今日の小學生徒は孟子よりも餘計に物を知つて居る。之は素より祖先のお蔭であるが、文明の技術、活版術、速記術、其他電信、電話、郵便、無線電信、無線電話といふ總て知識を傳へる所の機關が發展して來て居るから、昔の樣に口傳で以て聞かなければ分らぬといふことはない。例へば今日なら淺野内匠頭が御役目を言附つた所が、吉良上野介の厄介になりて、彼れに聞かなくても書物を買つて讀めば直ぐ分る。あの時代は如何せん吉良の老爺に聞かなければ分らぬ、夫を淺野が賄賂を使つて甘く聞かなかつたから彼の樣な大事に至つたのであるが、今日はさういふ時代でないから自然先輩の權威といふものが衰へるといふことになつた。之は日本の維新以後の狀態といふものが新知識を得ることの必要があつて、歳の長幼に拘らず新知

識あるものは段々跋扈するといふので、老人は屏息するやうに成つて來たのである。併し經驗は老人の方が餘計に持て居るから老人も段々歳を取ると共に勉强の功を積みて知識を增し、修養を勉めて人格が高くなつてくれば少年は益々之を尊敬する。老人が單に年の功だけで威張れなくなつたからと云つて、只今日の少年はいかぬと嘆聲を發するのは愚論である。我々も追々老人になるから怠たらず勉强して行かなければならぬと考へる。又、世の中のことを單純に考へて無暗に喜んで見たり、無暗に嘆じて見たりすることは甚だ愚な話であるから、これもどうか獨立の精神を以て能く自分の居る所の場所を明にして、己の地位にかへりみて、四方を睥睨して、社會の進歩に遲れない樣に、社會の進歩を助ける樣になつたならば何でもないことと思ふ。此社會が惡くなる、青年は段々墮落すると言つて只悲觀するのは間違つて居るから、戒めることは戒め勵む所は勵なくてはならぬ。また世の中には隨分善い事と共に惡い事も釀生してくるから、それを防ぐことをしなければならぬ。只妄りに今を非として、古を是とする尙古的の考はいかぬ。所が若い人でも追々それにカブれて樣々のことを云つて居るから、結局の所は昔曾子は日に吾身を三省すと言はれたが、今日の少年はカントが言つた如く人は二ッのセルフを持つて居るから第一の己を以て第二の己を省み、恰も鏡に向つて美人が形造りをする如く第一の己を鏡と見て、其鏡に向つて第二の己を照し、さうして其短所、其缺點を補ない正す樣にして行つたならば、卽ち精神上の美人が必ず出來上るであらうと思ふ。これは、アダムスミスも云つた名言である。而して古今東西の聖賢も此一點に於ては一致して居るのである。

宗教と教育

先年内務省で宗教會同とか云ふことを計畫し、宗教を以て教育を援けに向つて種々論議して居つたやうである。思考するに宗教なるものは或は社會の風紀を矯正すると云ふことに利用しやうとして、世間は之れ決して俗政府の干渉に依つて榮えたり、衰へたりすべき筈のものではない。併ながら日本に於ては或は幾分かさう云ふことがあるやうであるが、そういふことは決して永續すべきものではない。時の政府が或は宗教に肩を入れたが爲めに、宗教に幾らか氣勢を添えるやうなことがあるかも知れぬ、けれども其政府が倒れて次の政府になると、次の政府は又違つたことをやるから決して永く續くことはない、是は餘程間違つたことである。又先頃政府に於ては尊德宗と云ふものを頻りに弘めた。卽ち

二宮尊德翁の報德教を頻に勸めたことがある。是れも決して惡い事ではない、事柄は善いことであるけれども、政府としてはそんなことをすべきものではない。苟も德教に關する事、或は宗教に關する事、其他人心の微妙なる作用に關係したことに俗權を以て干渉するといふことは害あるも利なしと斷言しても宜しい。所が兎角さう云ふことをしたがるが、それは甚だ間違たことである。成程其爲す所の人には相當の考もあるであらう、又個人としては相當の手腕もあるであらう、而して其事柄も惡いことではない、併しながら決して政府としてやるべき事ではない。政府として此の如きことをやる段になると、例へば今の政府が見て以て危險思想なりとして居ることでも、次の政府はそれを實行させやうと力める事が起て來るからして頗る弊害が多いのである。されば學問、教育、宗教其他精神界のことに俗權を以て干渉すると云ふことは甚だ善くないこ

とてある。唯俗權の及ぶ所は其外面的の事に止めて置きたい。

そこで當時問題となつて居つたことに就て段々當局者の話を聞くと、決して俗權を以て精神界に干渉をするのではない、唯々各宗旨、各宗派の人を集めて雙方の打合せをする爲に、雙方の便宜を圖る爲にやるのであると云ふことであつた。さう云ふ辯明を聞いて見ると、それだけでは決して惡くはない。相當の便宜を與へると云ふだけならば强ち惡くもないが、それにしてもそういふことを何も政府の役人がするには及ばぬ、さう云ふことは社會に幾らも世話する人がある。宗教界の人、學問界の人にさう云ふ勞を執る人は幾らもあるから、何も政府の當局者が彼此とやらなくても宜からうと思ふ。所が日本では政府と云ふものが加はると、大層景氣が好くなると云ふ一種の妙な氣風がある。例へば文部省で邦樂調査會と云ふやうなものを拵へて、音樂學校で長唄だとか、清元だとか、常盤津だとか、其の他いろ〳〵の昔からの音樂を調べると云ふやうなことをする。是は音樂としてさう云ふことをするのは洵に善いことてある、又それをするのが當然であるけれども、更に一歩進んて裏面を窺つて見ると、其方の家本とか、師匠と言ふやうな人が今度お上から斯樣な仰せを被つた、政府で御調査になる、實に有難いことであると言つて隨喜の涙をこぼすその結果、容易に他人には示さない奥の手ても何ても打明けて了ふと云ふやうなことになる。そこらは大層都合が好いようだが、僧侶神官も外面丈けの見識は多少の相違あるとしても、其實清元の師匠とやはり同じことて、宗教の事は是迄一向お上ては構つて呉れなかつた所が、今度はお上て御呼出になつて世話をして下さる、大層有難いことてあると、斯ういふやうなことを考へる俗な坊主もあるから、そこてお上の當局者も惡るく調子に乘つて、何ても政府の力て出來ると思ふて、とんだ所まて

干渉するやうな事になつて來るかも知れぬと思ふ。而して吾が國民の氣風には總ての方面に斯る弱點があるやうである。

又政府が之を教育の上に利用するが爲め、各宗派の惡い所を去り、良い所だけを集めるとか、又は各宗の共通點を採りて異殊の點を除去するとか云ふ工合に、何か藥の調合でもするやうに考へて小刀細工を施し、又各宗の人もそれに應ずるやうなことが若し事實に於てありとすれば、其の宗教の權威は其の時に於て無くなつて了ふ、人心を感化する所の權威は其の卽座に於て消滅して了ふのである。何となれば各々特立の宗教と云ふものゝ有力なる感化力を有する所以のものは、寧ろ其各派の相違する點から起つて來るのであるからである。若し當局者の一言で、宗祖から傳つて來た各流獨特の其大切なる信條を添刪するやうなことがあるとすれば、どうして宗教として人の精神を感化する所の權威を保つことが出來やうか、卽ち其宗教は其時に於て自ら無能力に成つてしまうのである。內務省に於ては宗教利用の計畫をして居るが、同じ政府の一局部たる文部省はどう云ふ態度を執つて居るかと云ふと、文部省では宗教と教育とを全く分離して、教育には少しても宗教を交へては相成らぬ、又私立學校に於て宗教的儀式を用ゆることがありとすれば、其の學校を公認しないと云ふ規則に成つて居る。若し之を教育の上に用ゐて利益のあるものならば文部省と雖も之をなすが宜い、又害のあるものならば內務省と雖もそれを行つてはならぬと云ふことは當然である。

歐米各國に於てもセキュラリゼーション、オブ、エデューケーション卽ち還俗教育と云ふ事が近來頻りに流行して來た。歐羅巴では昔から僧侶が教育を支配して來た、學校は皆僧侶が立つたものである、又教育は僧侶が監督するものであると云ふことになつて居つたものである。而かも德育は是

非宗教に依らねばならぬと云ふことに成つて、此の點は今日と雖も誰も疑はない、然るに近時宗教を教育から分離すると云ふ譯は、普通教育を國民一般に施す事に成て見ると、租税で公立學校を設立せねばならぬ、而して教育は依然宗教家に任かして置くときは、其宗教家は必ず自己の所屬たる宗派の教義に依て、道德上の教をなすに極つて居る、それで其宗派の者は好いとしても、他宗派の者は自家の子女を其學校に出して自分の嫌ひな教義を授けられながら、其入費を負擔せねばならぬと云ふ頗る不合理、不公平極まる羽目に陷る事に成る、其上國家としても斯く種々樣々の宗派の教義を以て第二の國民を養成せられては、國家統一の上に於て差支を生じて來ると云ふ所から、宗教臭味を交へざる純俗的教育を施こそうと云ふ事に成つて來たのである。

併し矢張宗教の權威がなくては德育の效が見へぬ樣に思はれる、殊に彼等歐人の頭には宗教を離れて善惡邪正の觀念の起る心持はせぬと云ふ所から、教育上に種々の考案が起る。乃ち第一案は所謂宗派の合同である、即ち各宗の共通點たる神の存在、靈魂の不滅、來世の賞罰等の事を土臺として兒童を訓育するの方法を取るのである、併し此共通教義に當てはまらぬ無宗教者は此の合同的教育をも受くる事を潔しとせざるが故に、第二案としては學校内には毫も宗教臭味を交へざる代りに、各宗の兒童も各自別々の寺院に到りて禮拜し、說法を聽聞する事とするのである。第三案は内外共に一切宗教に依らずして、純粹なる俗的道德の教を爲す事である、要するに各國共に國教派の僧侶が一切の兒童を自家の教義下に化せしめんとするを憂へて、之を脫せんとするの努力より種々の考案が起るのである、又近代義務教育布及の爲に公費を以て小學校を設くる必要を生じたる結果、此教育俗化運動を起して來たのである。西洋の宗

派の關係は日本の如くではない。其の一例として假に西洋の禮式の本を讀んで見ると、一番初めに大抵斯う云ふことが書いてある、總て社交室に於ては政治と宗教に關する話は嚴禁なりと記載してある。政治を談ずると直に黨派的感情を引起して、知らず〳〵談話が議論となり、顏を赤らめ、口角泡を飛ばすようなことになる。又宗教の話も政治と同樣に議論が起る、さうすると和氣靄々愉快に樂まうとする宴會も忽ち殺風景なる議論場となる、是れは無風流不行儀の骨頂である。維新前後の日本では酒でも飲むと、大きな聲を出して議論するやうなことが一の御馳走になつて居たが、西洋では全く反對で、非常に育ちの惡い人、無教育の人、行儀を知らぬ人と云ふことになつて居る。此一事に徵しても彼等の社會狀態が推測し得らるゝであらう、そこで公共の學校に於ては、とても無事に或一派の教義を以て衆童を教ゆる譯には行かぬ、況や各父兄から其費用を徵收するに於てをや。

そこで此俗化教育卽ち宗教から離れて學校の教育を行ふに就ては、德育は如何にするか、今日歐米の學校ではバイブルを讀ませ、バイブルを本として德育をやつて居るのであるが、何派の教義であるとか、何派の儀式であるとか云ふものは禁じて居る。故にどうしても自分の宗派の教義で子弟を教へやうとする者は別に寄付金でも募つて特種學校を立つて、それで自分達の信ずる宗派の教育を受けさせて居る。是は銘々が別に金を出してやるのであるから一向差支はないのである。

所が日本では之を誤解して居る、宗教と教育とを分離するのは近來歐米各國の風潮であるから、日本も其通り分離しなければならぬと言ふ。そこまでは宜い。併し日本は初めから分離されて居るから、何も殊更にそんなことを言ふには及ばぬ、當り前にやつて行きさへすれば宜い。國

家の教育は當り前にやつて行けば宜いが、唯或る宗派の者が金を出して特別にやらうと云ふならばそれは構はぬで宜い、國家の統一に害なき以上は構はぬ、卽ち德育其他に就て國家の命ずる所に背かぬならば、其解釋の如何は其宗派の爲す所に放任して宜いのである、元來、政教分離と云ふ事は政治と信仰とは同一規定に依られぬから起つたのである、近來の憲政制度に於ては政治上の事は總て多數に從はねばならぬ、少數者の意見は全然行はれないのが今日の政治であるが、しかし精神上の事は斯の如く多數を以て壓服する譯には行かぬ、假令一人たりとも自己の信仰を立て通すの自由を失ふ者が出來てはならぬ、是が信教自由の由て起る所である、是非とも公立學校に於て某一派の教義を强ひて課する事を廢せねばならぬ、是が宗教と教育との分離の本元である。故に義務教育と云ふことを定めてあれば、其義務年限中國家の教令に依つて教育をし、其解釋方は佛教に據らうとも、耶蘇教に據らうとも或は又儒教に據らうとも、其他新しい倫理の學說を用ゐやうとも、政府はそれ迄干涉する理由はない、それらは各自の自由に任して宜からうと考へる。此邊が丁度セキュラリゼーションの目的とする所であらう。

そこで私自ら宗教家であるかと云ふとさうでない、自分は全く宗教と云ふものには關係しないが、併し凡そ如何なる野蠻人でも無宗教と云ふものは殆どない、必ず或る宗教を有つて居る。唯々野蠻なる者は野蠻の宗教を有つて居る、文明なる者は文明の宗教を有つて居る、併ながら全く宗教を有たない國民はあるまいと思ふ。尤も其國民中の或るものには宗教を有たない者がないではないが、一體此宗教と云ふものゝ起る本は何かと云ふと、先づ人間共通の疑問から起るのである。人間と云ふものはどうして起つて來たか、何處から來たものであるか、又此先きはどうな

るかと云ふやうな、卽ち來た所の源を討ね、到る所の未來を思ふと云ふことは人間には免れない。此先きはどうなると云ふやうなとはどうしても人間から離れない考えであるから、それを說明する必要が起る。其說明をするに就ては、野蠻人には野蠻人の納得するやうな說明が起る、文明人には文明人の納得するやうな說明が生ずる、それが宗敎である。所謂人生觀とか、或は人の過去未來を說く所のものが宗敎である。畢竟する に人間の弱點に付け入つて、人の悲んで居る所を慰め、喜ぶ所を喜ぶと云ふことは必ず其社會に行はれるのであつて、それが卽ち宗敎の形を成して來る。

又初めは銘々がさう云ふことを思つて居つたのだが、それに段々儀式と云ふものが加はつて來る、儀式が加はつて來ると、それは普通の人には出來ない所から特にそれを取扱ふ者が出來る、それが寺院であり、僧侶である。社會の法律がむづかしくなると辯護士と云ふ者が出て來るやうに、宗敎にて儀式が加はつて、素人に出來なくなると、茲に僧侶と云ふものが出來て來る。

故に此宗敎なる者は或る時代には非常に有力なるものであつた、又今のやうに宗敎の衰へた時代と雖も尙隨分有力である。なぜ斯く有力であるかと云ふと、人間以上の神とか天帝とかと云ふものが人心を支配するに有力なものであるのと、今一つには何でも子供の時に敎へられたことゝ云ふものは非常に心の底に强く印せられて居るのである。先づ家庭に於ては父母なり、祖父母なりはその子供の生れない前から或る宗敎を信じて居る、その家庭の中に育つた其上に、世間も亦同樣の信仰を持つて居るから、此の周圍の空氣が白紙の如き子供の頭の中に深く印象して、極めて力强い感化力になつて居る。是れは獨り宗敎に限らぬ、何事でも

子供の時に教へられたことは其人の頭腦の中に深く記されて、どうしても脱することは出來ない。何人も考へれば分ることであるが、子供の時から聽いたと、子供の時から感じて居ることは生涯脱することが出來ない。子供の時に偉いと思つた人は、後日に夫れ程尊敬すべき値打の無い人だと云ふことが分つても、其人の前に出ると矢張一種の尊敬心が起る、小學時代の先生は生涯先生として頭腦の中に殘る、又幽靈は墓場から出ると云ふことを子供の時に、子守や何かから屢々聞かされると、其考が頭の中へ染込んで、其後の教育に依て其迷信を破られて居ても、夜半に墓場を通る時には多少の恐怖心が起る。此れが幼時の印象は後日の教育よりも、學問よりも、理窟よりも遙かに有力であると云ふ證據である、封建時代に生れた老人の頭には舊藩の殿樣は尊いものと云ふ感じが何處かに殘つて居る、如何に其老人の頭に四民同等の理窟が分つて居ても、又殿樣の餘り利口でない事を知つて居ても、其老人が殿樣の前へ出ると自然に頭が下がると云ふ、是れは幼少の時から兩親や、祖父母より殿樣は有難い、殿樣の爲には命を捨てなければならぬと云ふことを、注入せられた感化力には、成人の後に學んだ所の哲學も、理學も、文學も及ぶものではないと云ふ證據である。西洋の基督教者も恰かも是と同じことである。其の一例を擧ぐると、進化主義の流行と共に造物主の世界創造說抔は馬鹿々々しいと云ふ事に成て來た、森羅萬象皆な進化變遷の作用に依つて段々出來て來たものであるといふことは、一般の學者、殊に進化論者は最も確く信じて居るのである。所謂優勝劣敗、適者生存、自然淘汰と云ふやうな作用に依つて此天地萬物の成立し、生存し、發達し來つたものであると云ふことを信じて居りながら、矢張りお寺へ行くと有難い、有難いと言つて聖書を尊ぶ、而も其聖書の舊約の初には、神は六日間に世界を造上げて最後に人

間を造つた、さうしてその鼻の孔から竹の管を以て魂を吹込んだと云ふやうなことが書いてある。今日の進化論の說く所とは雲泥月鼈の違ひがある、然るに進化論の泰斗とも云はれた或學者は矢張り之を信仰して難有がつて居る、是れ甚だ奇妙なことではあるけれども、併ながら人間の頭と云ふものはそんなもので、極めて不兩立な事が兩立して居られるのである、其譯は一方は感情、一方は理窟であるから、理窟の方では萬々承知して居つても、感情の方はどうしても取去ることが出來ぬ。そこで後から入つて來たものは理窟としては信じても、幼時から入つて居る感情を追ひ退けることは出來ぬ。一體理窟と云ふものは餘程年を取つて、頭腦が熟して來ないと分らぬものである。年齡で言ふと十歲以上になつて初めて推理の力で得た理窟が、どうしても二歲三歲の時から自然と其頭に染み込んで來た感情に打勝つことは出來ぬ。平生は理窟が勢力を得て居つても、マサカの時になると感情の方が勢を得て來る。どんなに進化論を唱へて居る人でも、九死一生と云ふやうな時になると南無阿彌陀佛が出る、如何に日本語の上手な外國人でも寢言は必ず洋語で云ふようなものであらう、此處が又宗教家の大につけ込むところである。宗教は常に人の感情に入りやすい方面ばかりを掌つて居る。殊にそれが幼少の時から家庭や、社會が常に其れを頭に注込んで居るとすれば、成長の後ち學問上から入つて來た理窟よりは人を支配する力が強い。故に感情の方から人を生捕つた宗教がいつも勝利を得るのである。併し幼少の時には何等の宗教的感化を受けずして、成年の後ち之を驅りて宗教に入らしめても、宗教が感情的に其の人の頭に入るかと云ふにさうは行かぬ、それは形だけは南無阿彌陀佛とかアーメンとか云ふであらうけれども、ホンのツケヤキバたるに過ぎない、併し又或る宗教に歸依したが爲めに大に

改善する人も少なからぬ所を見れば、年を取りても宗教の感化は無いとは云へぬけれども、是は宗教その物よりも寧ろ其同宗同行者の間の輿論の勢力に依るのである、即ち仲間の毀譽褒貶に制せらるゝの結果である。殊に其宗派の仲間が未だ少數にして、一般社會から擯斥せられて居る間が、最も嚴重に戒律を守る者の如く見ゆるのである。併し此宗派が廣く行はれて普通教となれば最早其效はなくなる、其の證據は日本現在の所ては基督教と佛教との比較に依ても知れるであらう。

かるが故に德育の本源は幼少の時に受けた感化が、最大勢力となつて生涯を支配すると云ふ事は明白である、換言すれば幼時の薫陶其者が即ち其人の宗教となるのである。昔の羅馬人の教育は近代歐洲の如く宗教的でない、唯羅馬の爲めと云ふ事でやり通したのである、羅馬の爲であれば火の中、水の中へでも入れ、羅馬の爲には生命も、財產も、名譽も棄てよと云ふのが羅馬人の教育の方法であつた。又希臘人にも今日の如き宗教的教育はなかつた。希臘の宗教は神話にあるやうな極く馬鹿々々しいことで、少しも進步したる希臘の人心を支配するやうなものではなかつた。希臘人には寧ろ哲學者の云ふ所のものが教になつて居たのである。

以上の如く成るべく幼少の時分から兒童の腦髓に印象を與へなければならぬとして見れば、又た最もそれに宗教が效力ありとしたならば、政府は何故に最も效能のある小學校時代からやらせないのか、何故に稍々成長した青年、義務教育を終へて社會の人となつた若者に對してそれを注込まうとするのか、是れは正しく利かなくなつた時分に藥を與へると同じことで、少しも役に立たぬ。文部省では宗教と教育とを全く分離して、小學校には少しも宗教を加へさせない、然るに內務省は民政を掌ると云

ふ所からして、社會に出た所の人間に向つて宗教を注込まうと云ふことは、現在の政府の制規に於ては一應尤もなようであるが、國民の道德を涵養する所の根本問題を處する上に於ては頗る姑息の議論である。若し又眞に宗教の感化力を利用するが惡いと云ふことであるならば、成長してからでも矢張り惡るい。そこが卽ち採否の極め所ではないか、兎に角是は善いものであるから使はうと云ふことならば、何故に早くから使はぬのであるか、又惡いものならば全く使はないやうにしたいのであるが、私は先づそれを一つ聞いて見たいと思ふのである。

そこで斯ふ云ふとはなか〳〵容易に極める譯には行かぬ、政府として斯う云ふ問題を決する場合には、十分に考へた上でなければならぬ、此間まで二宮尊德とかをやつて見たが、是も餘り面白くなかつたから今度は宗教合同をやつて見やう、それが面白くなかつたら此次は何にしやうと云ふ風に、恰かも三越や白木屋で衣服の流行を出すやうな、そんな輕々しい譯に行かぬ、それを一日か二日集會して贊成だの、反對だのと云ふ抔は益々分らぬ譯である。

國家思想と宗教

國運發展の一要件としてその國民は國家思想と、世界思想が幷立して發達しなければならぬ。國家思想のみ鞏固にして、世界思想の發達せざる國民は世界の大勢を知らず、世界の進運に適應すること能はず、從つて世界に雄飛することは出來ない。又世界思想のみ發達して、國家思想の薄弱なる國民は、終には他國の爲めに征服せらるゝの悲運に陷るを免れない。故に國家思想を益鞏固ならしむると同時に、世界思想の發達に勉むること、之れ國運發展の要件である。

基督教は主として人道を說く。佛教は專ら平等を主張する、共に非國家主義の宗教である。故に一部の學者間には、是等の宗教は國家思想を破壞するものである、國民の愛國心を消磨するものである、といふ一點より宗教弘通の反對說を主張するものが珍らしくない。然れども是れ畢竟一面を見て、全體を見ざる所の偏見說に過ぎない。

由來基督教を國教として國運を發展せしめ來りし歐洲諸國、殊に英國の如き、佛蘭西の如き、獨逸、露西亞の如き、又古來佛教の最も盛んに行はれし我が日本の如き、何づれも世界に於ける國家思想の最も强烈なる國民を有する所の國家ではないか、又基督教や佛教に比して遙かに國家思想に富める所のマホメット教の普及せる國々の有樣は何うであるか。却つて國家思想の萠芽だも有せざるものが多いではないか、右手に劍、左手にコーランの信條を奉じて國家の形を爲したる國々も、今は至る所衰亡の悲運に陷つて居るのである。

予が先年歐洲を巡歷して土耳其に立ち寄つた、その際に土耳其の一大臣を訪ふて、餘談はその國民の人口に及んだ。大臣は『吾が國の人口は總數二億に達して居る』といふ、土耳其國民は一千萬乃至二千萬に過ぎないのに、二億と稱するは甚だ奇異に感じたから、予はその譯を正して見た。所が彼は單に土耳其國民のみならず、埃及人も、印度人も、亞弗利加海岸一帶の住民も、總べて全世界回々教の弘通せる土地の住民を殘らず土耳其國民と稱して居るのであつた。成る程之にも一理ありと考へられる彼等回々教の信徒は、世界の何處に住するも皆土耳其皇帝を中心として之れを尊崇して居るのであるから、土耳其皇室の臣民は、單に土耳其國の住民に限らぬとするにも一理なきにはあらず。斯くの如く澎大なる多數の信徒を有するにも拘はらず、又其信徒はコーランの經說に基いて、强く

國家思想を鼓吹せらるゝにも拘はらず、土耳其は今や吾々が目前に見る通りの悲運に傾き、其他回々教の行はるゝ何れの地に於ても、その教徒は唯だ己れの宗教あるを知つて、國家あるを知らざる有樣である。

主として人道博愛を說く所の歐洲の基督教諸國、及び古來慈悲平等を本義とせる佛教の行はれたる我が日本、是等の諸國には國家思想が甚だ盛んにして、而かもその國運は益々隆盛に進み行くに反して、國家主義の上に立つ所のマホメット教徒には、却つて國家思想の見るべきものがない。此事實は如何なる事柄を證明して居るかの點を考へて見なければならぬ。

元來我々の社會といふものは極めて複雜なる關係を以て成り立つて居ると同樣に、國民の思想の根源は極めて深く、遠く、且つ複雜である。政治が之に關係し、教育が之に關係し、國家の歷史が之に關係し、家庭及び鄕土の風習が之に關係し、その他社會百般の事々物々が之に關係し、纒綿し以て國民の思想が知らず識らずの間に涵養されて行くのである。故に單に宗教の力のみを以て國民思想が全然陶冶され得るものと考へ、世界思想を說く所の宗教を信奉すれば、國家思想が消え失せるといふ如き杞憂を抱くは、社會の最も幼稚なる野蠻時代は兎に角、今日に於ては畢竟その一面のみを觀察したる僻見に過ぎない。

國民思想の源流たるや斯くの如きものであるから、宗教は寧ろ國民思想の缺點を補ふといふ點に於て國民思想の上に働けば、それだけでも十分の効果である。寧ろ宗教は多くさういふ傾向を以て發達して來たやうに思はる。故に宗教は食物にあらずして、藥石の効を有するものである、例ば孔子が極力利を賤めて義を說きしは、支那人の如き利益一偏の國民には必要であつた、然るに支那は三千年來仁義を聽いても利を忘るゝ

とは出來ぬ、又基督教徒も富者の天國に入らんとするは駱駝の針の孔をくゞるよりも難しと教へられ、又之を信じながら歐米人の拜金宗を見るも同樣である。

故に國家思想に對する宗教の立場は、大體に於て此方針を取つて差支へはないと思ふ。佛教には王法爲本を說くことがあるが、それも差支へはない譯ではあるけれども、强いて一部の偏屈なる學者などの說に調子を合はせる爲めに、國家主義にも重きを置いて居るといふ言ひ譯に、殊更ら王法爲本を振り廻はす必要はないと思ふ。日本國民は寧ろ國家思想に片寄る傾向を多く持つて居るのであるから、眞向から世界思想を振りかざして、人道、平等、慈悲、博愛を說くことは、宗教家の人心指導の態度として最も當然であると思ふ。然れば宗教は國民本來の思想と矛盾することはなきかとの疑問が起るかも知らぬが、矛盾して差支へはない。この複雜なる社會には矛盾の兩立といふ實例は澤山ある。故に政治、教育、歷史、風俗等を以て極力國家思想を涵養して行くのであるから、宗教はそれに對抗して世界思想を鼓吹して行けば兩思想は恰度適度に調和して、正さに完全なる思想を以て進むことが出來、國運を發展せしむることが出來るであらうと思ふ。

予は嘗て加藤博士の或著書を讀んだことがあつた。所がその一節に『忠孝は人の性には本來具有されて居ないものである、故に之は名教の力を以て導かねばならぬ。然るに耶蘇教や、佛教は專ら平等博愛を說き、世界思想を鼓吹するものであるから、是等の宗教の教へるまゝに放棄して置けば、我國の忠孝思想は亡びて仕舞ふ』といふ意味の議論が陳べてあつた。然るに其次ぎの節には「歐米人には忠孝の念はないかといふに決してない譯ではない。忠孝は人間本來の性であるから、如何に博愛主義の

宗教を以てするも、之を沒却せしむるとは出來ないと」いつてある。加藤博士の此二節の意見は單に矛盾せるばかりでなく、矛盾の兩立を證明した意見だと予は認める。故に世界思想を鼓吹する所の基督教や、佛教が國家思想に矛盾すればとて、決してそれを顧慮するには及ばない。のみならず矛盾せる點に於て、宗教が國民思想の上に活動すべき任務があると思ふ。

硬教育と努力主義

硬教育とは近來聞こゆる聲であるが、其の本義は抑も何であるか。硬教育は努力主義の發現であつて、努力主義なるものゝ鼓吹が現在の教育界に必要であるといふならばそれは尤な事であつて、我々も亦無論贊成の意を表さなければならぬ。既に分り切つた事である通り、注入主義では行かぬ、開發主義でなくてはいかぬ、手を持つて老婆的に教え込むよりも生徒本然の能力を誘ひ出し、之を發達させる樣に勉めなければならぬ。教育といふものは澤山の知識を外から持つて來て、無理遣りに人の腦中に押し込むものではなく、各自本然の能力を誘導し、陶冶して自ら必要の知識を吸收し、之を咀嚼し、之を獲得せしむるのである、それで初めて力あるものとなつて、實世間に處し十分の活動が出來ることになるのである。卽ち生徒をして自らの努力に因つて、自らの知識を作る樣にする、斯ういふ主義の發現であり、鼓吹であるといふならば固より結構なことに相違ない。假へば鳥を食膳に供するとする、之を買つて來れば來られるが、併し自ら獵銃を擔いで郊野に驅せ、山澤に入り、滿身の汗を絞つて、然る後其獲物を齎し歸り、之を庖丁に付する方が如何程愉快であり、又幾多の副產物的利益があるか知らぬ、努力主義の教育も亦斯の如く自ら山野に獵して

鳥を獲しめるのである。鳥を店から買つて來るのではない。硬教育の求むる處亦此處に在りとすれば言ふ迄もなく宜い事に相違ない。

併し其所謂硬教育なるものゝ目指す所が此處になく、唯徒勞的努力さへさせれば宜いからといふので、其教授の材料や、器械となるものに記憶に困難な者を用ひ、無理に强ひ付け樣とするのであるならば、是れは要も無い所に無暗に力を消費させるものであつて、飛んでも無い量見違ひである。教育の最も重要なる點は其材料や、器械でなく、其材料や、器械によつて導かれ、或は盛られて居る知識の內容にある、否此知識を得る爲に精神が得る訓練である。それ故生徒をして十分努力吸收し、十分消化し、十分體認せしむるならば宜しいけれども、然らずして只六ヶしい材料や、器械を用ひ、それを無暗に記憶させ樣などゝする事は、全く教育の眞義を了解せず、教育の目的を會得せぬ分らずやの行ふ所である。卽ち思想を現はす言語や、文字の如きものが六ヶしいからとて何にもなりはせぬ、それを只努力さへさせればよいといつて、面倒な漢語や、漢字などをも何等の選擇なく、無遠慮向ふ見ずに使はうとするに至つては何の意味か薩張り了解が出來ぬ、例へば子供といふ事は其の儘子供といへば、最も普通に行はれて居る言葉だから誰にも能く分る、然るに少年などいふと餘程六ヶしくなる、更に青年などゝなると尙ほ六かしくなる、その六ヶしいのを努力して分つて見た所で、得る處の內容は矢張子供といふより他の內容は入つて來ぬ、之をも敢てするは丁度十錢で買へる品物に强ひて一圓を投じ、二圓を投じ、三圓を投ずる樣なもので、投じて見た處で掴む品物に變りはないとすれば安い方が宜くはないか。これをも思はず、今頃六ヶしい漢字、漢語の復活を內容に含めて、而して努力主義を叫び而して硬教育と名くる樣のものがあるならば、其徒は言語道斷、愚者の骨頂である。

しかしながら我國現在の社會の有樣に於ては漢字、漢語を通用して居るのだから、其制限などといふ姑息の事は決して行はれるものでない。學校で制限して敎えても、世間ではそれ以外の字を澤山用ゐるとすると、勢ひ場合々々に順應すべく、矢張り制限以外の文字を覺え、又用ふる事になる、迚も制限などで所期通りの効果を得られるものでない、それ故現在の社會からすれば幾分か漢字、漢語を敎ふる事も已むを得まいが、これは單に記憶上の事で、强ひてこんな無益のものを多量に敎え込み、其樣な事で努力さするのは眞の努力主義でも何でもない。

其他にも或は趣味敎育を抑えて、無暗に文藝を壓迫するとか、女子敎育に對して消極主義、復古主義を取るとか、頗る暗中摸索の事が多い樣だが、又た專門を貴ぶの餘りに其知識が普遍的でなく、一局部に偏し、其專門以外は全然無知識である、眼界が極めて狹い天地に限られて居る、それ位はまだよいが、其狹い專門內をも小分し、細分し、甚しき局限主義に陷るから、却て自家專門の事さへも眞に了解する事が出來ぬ片輪者が出來る。先づ要は一部局の事に深く精通する上に、凡ての事に一わたりの知識を有し、各其事に從事するのでなければならぬ。此意味に於て私は今日の高等敎育の弊を痛切に認めるのである、素より精しからんと欲せば專ならざるを得ぬは當然の事だが、其專なる者を定めた上に、更に自餘の學問にも相當の注意を拂ひ、一わたりの原則位は心得て居らなくては叶はぬ、吾々の生活は共同生活である、從つて其上に生るゝ學問は、何れも又互に交渉聯絡の無いものはない。卽ち其關係を求め、其絲筋を辿つて行くならば盡く繫がり合ふべく、引き合ふべき者である、それ故專門に心を用ひ、其事に精からん事を欲しても、勢ひ其補助として自ら又他の知識を要する事になる、否他の知識を要する事なくして、其專門にのみ精くなるといふ

事は實に出來得べき筈のもので無い。然るに今の教育の仕方は此點に於て甚だ疎てある。私は今少し實世間に接觸し、實世間の知識を獲得して、之れを體する樣にしたいものと思ふ。

更に翻て國民教育の點に於ても、私の理想としては小學校教育の根底からして全然改良したいのである、併し是は容易に今行はれる事でない、而して其行はれない理由はチャンと自分にも心得て居る、而かも尙且つ理想として丈も語つて置きたい、それは日々の學校に於ける授業時間を大に減少して、其代りに學生をして日々實際生活に接觸せしめ、心身の發育に害なき範圍に於て、父兄と同じく相當の職務に服し、相當の勞働に從はせる事である、其代りに就學年限は今よりズッと長くても宜しい。即ち現在では義務教育年限を四年の處を六年に延ばして居るが、更にそれを八年なり、九年なりにしても構はぬ、僅か六七歳より十二歳迄では駄目だ、全體教育の時期と實生活の時期とを餘りに截然と劃定し過ぎて居る、教育を受けて居る時期には實生活の事は薩張り知らぬ、實生活に携はると爲つたら教育の事は又一擲して顧みぬといふ風であることは、一般の教育も高等教育の方にも共通の弊風と成つて居るではないか、實生活に處するも一つの教育である、其方の教育も幼時からでなければ眞の効果を得ぬものである、然るにその好機を空く逸して、徒らに机上の學問で全部を占領せられては詰らぬ事である、又仕事の中にも自ら幼兒に當て嵌まり、幼時に於て他の模倣し得ざる特長を發揮するものがある、之をも學校教育の爲めに妨げられて、其の能力を社會が用ふる事が出來ないとすれば甚しき不經濟を見るではないか。殊に日々學び得た所を直に實際に行はるゝに於ては、知識が一歩々々に踏み固められて行く道理、習つた事が仇に爲らず、日々夜々に實際の力と爲る。すれば又各自の頭に言ひ

知らぬ快感が生じ、從つて又好學の念を加へる譯にもなる。卽ち此の如くして予の言ふ意味に於ける努力主義の効果は十分に得られる事になる。而して初から實世間と離れずに行くから趣味も、注意も多方面になり、自ら知識も普遍的になつて、他日狹き專門に入るに於ても補助の知識が十分に備はり、自ら偏固の疾を免れしめる。今の樣に一日五時間も六時間も幼弱の者を教室內に閉ぢ込めて、而かも教員等は之を以て尙ほ足れりとせず、或は宿題を課するか、又は豫習を命じて成るべく多くの時を日課に費さしめるを以て、却つて自己の熱心を示すの具に供して居る。生徒の幼少なる腦力としては眞面目にやつたならば、殆んど學校の事以外に時間の餘裕はない、それでは六ヶ年の義務教育でも父兄は大に困ると云ふ譯は、十一二の子供を使役すると云ふのではないが、彼等に子守をさせる時間もなき事となつて、農民等の仕事には多大の打擊である。此點からして實際に於て農民は義務年限の延長には非常に困つて居るのが地方の實況である、併し予の言ふ樣に學校の時間を半減して一日二三時間にし、又午前と午後の二種にでも分けて教へたならば、義務年限は八年と成ても父兄の仕事は餘程容易く遣繰が着き、少年も學實兩樣の教育が出來る、或は年一年と上級に至るに從ひ、學校で其時間を短縮して反比例に勞働時間を長くするもよい、そして年と共に次第に在校時間を短縮して、終に全く學校と絕緣して實生活の人となる樣にするもよかろう。

素より幼兒を强き勞働に服せしむるとの惡いのは云ふ迄もない、工場法案等にも十二歲以下のものゝ使役を禁ぜんとして居るが、既に上來陳述した樣な幾多の理由ある條件の下に、多少の服勞は決して差支ない事と思ふ。徒らに外國法律の形式に倣つて、其精神の在る所を究めざれば大に正鵠を失することとなる。外國人と日本人とでは父兄の子弟に對す

る工合は大に違ふ。外國の下等社會では親が酒を飲み、博奕を打ちながら、小供を犧牲にして其賃錢を貪らんとする者が少からぬが、日本人は子を愛する事少しく程度を越ゆるものこそ多けれ、決して無理非道なことはせぬ、故に此邊の事は今日の所では父兄に任せて大概安心が出來る。又就學の部合も九割五分にも上つて居る。要は國民教育も、高等教育も大に舊來の方針を改めて、實地的にならん事を希望する。此意味に於て予は努力主義の方針に依る所の硬教育を主張するのである。

義務教育年限（二部教授法普及）

義務教育とは卽ち初等教育とも、小學教育とも、又國民教育とも云ふて、取りも直さず一般國民に必要なる最低の教育であつて、少くも是れだけの教育を受けなくては國民となることが出來ない者である。我國では此の最低限度を從來は四年とし、之を以て義務年限として居つた。然るに日露戰爭以後に至つて教育年限の延長論が勃興して、之れを六年と云ふことにした。これは文明各國の例を見るに少くも六年或は七年、八年、長きものは九年と云ふやうな義務年限で教育しつゝあるに、我邦が一等國となつて四年を以て義務教育の年限として居ると云ふことは如何にも不充分であるから、差當り之れを六年にしやうと云ふことになつた。併し此の二ヶ年の延長には餘程經費の增長が伴ふて來る。市町村の經費が大に膨脹する、是れが最も困難なことである。併しながら先づ經費も問題だが、文明世界に於ける立國上止むを得ないと云ふことから彌々實行されることになつた。其の後僅に數年を經たる今日に於て、又茲に議論が起つて、どうも地方費の膨脹が甚しい、町村の負擔が如何にも重い、其の重もなるものは教育費である、之に向て何とか削減を加へなければならぬ

と云ふ所から、其後起つて居るところの議論は、六箇年を短縮して五箇年にしやうと云ふのである。併ながら教育の程度を下げることは宜しくないから、先づ暑中休暇とか、冬期休暇とか云ふやうなことを成たけ短縮し、又毎日の各授業時間が四十分づゝて終るのを、五十分づゝにしやうと云ふやうにして、それやこれやで以て一方補ひを付けて學力の低落を防ぎ、全體の上で一年を短縮すると云ふと、餘程經費を減ずることが出來ると云ふ論が大分ある。一應尤の樣に聞ゆるが實は餘り目の子勘定な方法で、教育殊に小學教育には到底適用し難い議論ではあるまいかと思ふ。

予は全然其正反對の論者である。予の議論では義務年限は長くするが宜い。八箇年にするが宜いと思ふ、併し現に一部の論者が六年が長くつて、經費の負擔に堪えないから、五年にしなくてはならないと云ふ矢先きに、之を八箇年に延ばさうと云ふと。必ず是等の人々が意外に思ふて、是れは單純に教育其物を尊重して、經費の膨脹と云ふことは顧みない議論であると云ふかも知れない。如何にも教育の爲めには經費の膨張も忍ばねばならぬ事は素よりの事であるが、併ながら經費の徒らに膨張すると云ふことは、彼の年限短縮論者よりも却て予の方が一層深く憂へて居る。現代の國民の經濟上に多くの負擔を課することを憂ふると同時に、次の時代の國民たる今日の小學兒童の腦髓に向て、過重の負擔を課すると云ふことも、彼の人々より多く憂へて居る。予の說を用ゐらるれば教育費を減じ、學科も輕くなるかも知れぬ。併し此際突然八年說などを持出す時は甚しき突飛論のように聞ゆるが、決してさうでない。予は八箇年說をふ唱ると、同時に日々の授業時間を今日の凡そ半分に減ずる。即ち年限を二倍する代りに、日々の授業時間を半減すると云ふことを主張する。斯の如くすれば最初六年に延長する時に、何せ八年に延長しなか

つたか、當時何せ時間を半減しなかつたか、甚だ殘念な事をしたと思ふ、丁度半分にしなくとも、大凡其邊を以て毎日の時間とすれば宜しい。斯の如くすれば學校を二重に使ふことが出來る、教師を二重に使ふことが出來る。又生徒をも教育及び實業の二重に使ふことが出來る。斯くしたならば午前に三時間やる生徒と、午後に三時間やる生徒との二組に分ける、乃ち一の校舍を以て午前の教授、午後の教授と二重に使ふことが出來、又教師も午前の三時間、午後の三時間教ゆるとして、一日の勤務は決して長い時間ではない、今日と變らない。又斯の如くしたならば義務年限四年の當時の經費を以て、八年の義務教育を行ふことが出來る、是は計算を待たずして明かである。

最も少ない入費で最も多くの收獲を得るのが經濟の原則である。そこで或る教育家は斯の如く時間を減じたならば、年限を延長しても矢張り教育の効果は薄いと、斯う考へるかも知れないが、それは大なる誤りである。教育の効果と云ふものはそれに依つて少しも變らないのみならず、之れを八箇年に延長すると、却て非常なる効力を增すことは明白である。總て最も少ない入費で最も多くの收獲を得やうと云ふのが經濟の原則である、教育に於ても亦然かせざるを得ぬ。少年の未熟な頭腦を毎日五時間も六時間も學校教育と云ふ一事に使ふと云ふのは頗る有害のことであり、又それが爲に趣味を生じないのみか、甚しきは之れを忌み嫌ふの傾向を生ずるものである。朝の中は元氣にやつても、午後になると厭やになると云ふやうなことは、是は普通のことである。又今日能く聞く如く、此の頃のやうに米價が騰貴する時は、皆な段々困窮して來る。學校の辨當調べをやることがある、さうすると空の辨當を持つて來て居る小供がある、何せ空の辨當を持つて來るかと云ふと、貧乏で米が買へない、併し

辨當を持たないで行くと云ふのは不體裁、不外聞だから、空の辨當を持つて來る、如何にも悲慘な、可愛想な話である。假令是等は少數のことゝしても、斯くの如きことまでして、小供を終日學校に引つ張り付けて置くと云ふことは、全體何の爲にするのであるか。晝飯を食はないで學校に居つたからつて何にもなるものではない、唯だむやみに形式に捕はれて、生氣なしに長時間の授業を強制的にやつても、其効果は果して如何であらうか、甚だ疑はしい。兎角何事も根本的に考へずに、外國でもやつて居るとか、是までやつて來たからとか、因襲的に、形式的に、模倣的にそれを行つて、實質の如何と云ふことを考ふる頭が全體に乏しい。教育家にも、政治家にも、又全體の父兄にもそれが乏しい。教育を一時に多くやればそれ丈効能があると思ふようだが、さう云ふ譯のものではない。飯を食ふのにも一度に多く食へば、それて一日食はぬても宜いかと云ふと、それは却て腸胃を害するのみて營養になりはしない。藥を頻繁に飲んだり、日に幾十回も溫泉に這入たとて、其割りに効能はなくて、却て病勢はつのる。教育も同じ事である、例へば極端な話であるが、一日に十時間教へて一箇年やるのと、又其反對の極端に一日一時間づゝ教へて十箇年やるのと、斯う二つの事を比較して見て、どちらが効能があるか、假りに此兩極端を比較して見るときは、誰でも必ず一時間の十年說に効能あるを認めるであらう。十時間づゝ一箇年の間にやつて仕舞つた所て何にもならないのみか却て其害や甚しい。誰れも此兩極端の孰れをもやりはすまいが、道理は先づそんなものである。

或る時期に於て或る能力が最も活潑に働き、他の時期に於て他の能力が有効に働く者である。兒童の身體の發育の順序に隨て、飲食も變じて行く如く精神の發育順序に隨て、其食物たる教育に於ても、其時機に依て

相違が生ずるのである。即ち小供は六歳や七歳で覺へない事も、八歳九歳となれば覺へるようになり、十歳以上になると一層發達して、其の以下では分らぬ事も分かるようになり、考へない事も考へ得るように成る。それから推理力と云ふものも十三四歳になれば、餘程出來て來ると云ふやうな風に、種々の能力が時期に隨つて發育する。其中にも或る時期に於ては或る能力が最も活潑に働き、他の時期に於ては又他の能力が最も有効に働く、それを利用してそれ相當のことを敎へると云ふことが必要である。それが爲に一日に二時間乃至三時間と云ふ短い時間で宜しいから、それ相當のことを年齡に應じて敎へつゝ、十四歳まで行くと大抵の事は分る、一遍に色々のことを分るやうにしやうとしても分らないのみならず、十歳以下で學んだことは全く益が無いとは言はないけれども、具體的にどんな事も殆んど出來得られない。それは吾々が自分の幼少の時に徵して見ても能く分つて居る、先づ十歳前後では無我夢中で、何の事か分らずに學校に通つたのであるが、其の結果として何物を得たのだか、薩張分らない。

衆議院議員を選擧すべき義務を適當に行ふ樣になるといふ事は、今日の遣方では思ひもよらぬ。即ち今の義務敎育時期位の間と云ふものは何も分らない。それが十三四歳になると學問上の趣味が起つて來て、さうして自ら進んで其事を學ばう、其事を知らうと云ふ念が起つて來る、そうなると僅か一年か二年位に意外に進歩する、其進歩する時期に於て其以前に學んだことも急に効能を現はして來る。恰度以前より蓄積した所の力が一度に伸びるやうな心地がする、是は確かに人々各自の幼少の時の事を追想すると、思ひ當る事が澤山あるだらうと思ふ。然るに今日唯だ機械的に義務年限の六年を五年に縮めて、時間を增してやりさへす

れば宜い勘定だと思ふが大間違ひの沙汰である。十歳や十一歳までに五年位やつたのでは、普通の讀み書き、算術も出來ない。一人前の男女として必要な知識は得られない、況んや衆議院議員を選擧すべき義務を適當に行ふと云ふやうなことは、今日のやり方では何時まで經つても、其程度に達しやうとは思はれない。そこで先づ十歳以下の時には十歳以下相當の事を教へて、殊に德育上のことなどは成べく小供の時から頭腦に染込ませる必要がある、是は小供の時程効能がある。今日の初等教育の授くべき科目全體に於てどうしても十三四歳まで續けなければ、何の事だか分らないで濟んで仕舞ふ。併し年齢がその邊迄行かないと、毎日毎日辨當持ちで行つて、長い時間やつたからと云つても矢張分らない、寧ろ短時間で之を長い年限の間やると、其長い間に年齢が長じて來るから、以前幼少な時に幾ら聞いても分らなかつたとても、自然と自覺する樣になつて來るから、其成長時期を利用すると云ふことは頗る大切なことである。

今日では實業的習慣の養成と、學校教育とが全く沒交渉になつて居る。由來教育は學校ばかりでやるに限つた者でない、又總て必要なことを學校で教へて仕舞はなければならぬと考へるも間違ひである。成程或る事柄は是非學校の教授に依らなければならぬけれども、其他のところに就ては種々の經驗を積み種々の感化を受けなければならぬ、家庭に於て、社會に於て、種々の方面から感化を受け、種々の方面から經驗を積まなければならぬ。殊に國民の大多數は農工商の實業に就て生涯を送るべき筈の者であるから、農なり、工なり、商なり必ず己の後來に執るべき所の職業と教育とが結付いて、知識と實際とが共に進んで行かなければならぬ。然るに日本では學校に於ては職業の事は少しも振返つても見ず、又職業に就くと學校の事は全く顧みない。こう云ふ風に學校生活と實業生活と

區域の立つて居ると云ふことが、日本の今日の狀態であるが、是は甚だよくない。そこで以て學校教育は實業趣味を沒却することになる、況んや小學より中學に入り、中學より高等教育に入る所の青年に至ては、益々實業的趣味を失なふて、手足を使ふことを厭忌するのが今日の通弊である。是は全く教育の仕方が餘りに社會と沒交渉になつて、實業的習慣の養成と、學校教育とが全く互に沒交渉になつて居るからである。小學校に於ても確かにこの弊がある。小學教育中の少年も一日の中或る時間は學校教育に、他の時間は實業上に之を使ふと云ふことにならなければならぬ。

先年の議會に於て工場法と云ふものが出來た。これは、まだ施行には到らぬけれども、此の工場法に於ても義務教育年限中の學童を工場に使用してはならぬことに成て居る。但し先づ當分の中は十歲以上の小供には或る輕微な仕事を課しても構はぬと云ふことになつて居る。併し追ては十二歲まで許さぬ事になる筈に成て居る、是れは當然の事で、義務教育の大切なると同時に發達しない幼少の者に向つて、過重の勞働を課すると云ふことは身體の發育を妨げるから、愼まなければならぬことである。併しながら義務教育年限中は全く工場に使はせないと云ふのも、甚しい杓子定木と云ふものである。學齡少年では身體相應のことを働らいて、實業的練習を積ましむるのが、矢張一大教育である、殊に燐寸の箱を貼るなど輕微な仕事は、自分の玩具を拵へるのと何も違つたことはない、輕微な業ならば、餘り多くの時間でない以上之を爲さしめるが宜い。然し學校時間を今日の儘にして、若し十四歲まで教育を續けると云ふことになつたならば、それは色々の苦情が出るに極つて居る。小供に農業や、工業の手傳をさす事が出來なくなると云ふ苦情が囂々として起つて來

るであらう。現に六年制になつた丈でさへ、既に苦情が地方には起つて居る。某々の地方では斯う云ふ苦情も聞いた、卽ち義務年限が六箇年になつたが爲に非常に困る、是では農業は次第に衰へて來ると思ふ、全體近來の農業衰頽の原因は色々あるけれども、義務教育年限の延長も其の一大原因であると思ふと、斯う云ふ苦情があつた。其の訴ふる所に依ると、例へば十一二歳の女の子供杯は大して直接に農業に役立ちもせぬが、子守に使へば誠に調法だから、それ等に子守をさせて置いて、母親は田畑に出て働らくと云ふことになる。然るに六年間は學校に行かなければならぬ、子供の守りは母親自ら爲さなければならぬから、自然農業に行けないと云ふやうな譯で、農業の衰頽を來たすと云ふことであつた。

義務教育の年限を延ばせば斯樣な苦情は出て來るが、是れは六箇年制の罪ではなく、日々の時間が長が過ぎるからの弊である。これが若し毎日二三時間の授業であつたならば、決して其んな苦情も起らない、午前の三時間と、午後の三時間とを交代して、學校に學ぶことになれば、子守は無論のこと、農場なり、工場なり、商店なり何に使つても差支ない。是れ迄よりも餘程實業上に小供を使ふ時間も多くなつて來る、是が大に國民全體に取つて有益である。乃ち今いふ所の勞働の習慣、職業の訓練と、學校の教育と幷び行はれると云ふことが出來る。殊に日本人の特色たる指先の器用な事杯は、幼少の時からの仕込が大切だ、成るべく筋肉の柔い時分から從事せしむると云ふことが大切である。學校に行く間は他の事を顧みないと云ふ事は甚だしき惡風である、學校に行きつゝ親のすることも、兄弟のする事も見て自分も傍から眞似をする、卽ち一方に學校的知識を養ひ、他の一方に實業的習慣と訓練を得ると云ふ事が國民教育に最も必要である、之は國家の基礎に關する問題で、是非此教育實業併行主義で

行かねばならぬ。小學教育を此主義で行へば中學大學まで學問をしても、矢張り實業的趣味は失せない。只其實業を以前より、より大なる仕掛に於て之を行はんとする欲望が起る迄である。故に或る外國に於ては工場に於ても學齢兒童の職工は之を午前組午後組と二分して、交代に仕事せしめて、教育の時間を與へるか、又は隔日〳〵に交代させて居るのもある。併し教育家は之を現在の二部教授なる者と同一視し、吾輩の説に賛成せぬ者もあるが、此二部教授が何故に惡るいかと云へば、何等の理由を持たぬようである。義務教育は社會の總ての人と共に考へねばならぬ問題である。教育の事は素より教育家に聞くべきだが、其外に父母の考、又町村の經濟を研究して居る人の考、又は其結果を受ける所の貧富各種の良民の考も聞かなければならぬ。然るに今日は政府其他が教育上の制度を調べ、其他の制度を定めるに付ても、机の上でやるから眞に社會の事情に適切でない仕事をして居ることが大變に多い。近頃制度整理の考案中で頻りにやつて居るが、制度整理と云ふことは餘程廣い意味のことで、教育制度の整理も大に考へなければならぬ。他の事柄には人々に依て色々關係の薄い者と厚いものとあるが、此の初等教育、義務教育、小學教育と云ふ者には總ての人が直接に關係を有つて居るから、世人と共に充分之を攻究したいと思ふ。今日六年でさへ長い、經費が多過ぎると云ふものを、八年にすると云ふのは、突飛なやうに感ぜられようが、其實は四年に短縮したと同じ經費で出來ると云ふことに成る。要するに經費は減ぜられて効力を增し、而かも教育と實業の聯絡を密接にすると云ふ、一擧三得の良策である、近時義務教育年限短縮の議論が盛なるに付、年來の宿論を吐露して置く。

私學と經世

一時二個師團增設に就ての議論が頗る喧しかつたが、是も卽其一例であつて、政治上の事には常に議論が多い。師團增設すべし、增設すべからず、或は海主陸從とか、陸主海從とかの國防論もあれば、財政論も、稅制論もある。尤も是等は其時々の政治的時事問題であるが、其根本たる政治の學問に至つても、亦議論が數派に分れて居る。又憲法の解釋に至つても、決して議論は一致して居ない、經濟の事亦然り。法律の事亦然り。大凡そ形而上の學問になれば、決して議論の一致するものでない。殊に倫理の問題になると最も喧かましく、實に其議論は數千年の昔から今日に至つてもいまだ盡くる所を知らない有樣である。併ながら若し此多岐に分れて居る議論の中で、或一說を社會に强制する爲めに、俗權を以て諸他の議論を壓服し、それ以外の說は一切之を排斥してしまふといふことがあつたならば、國家の進步はそれつ切り止つてしまはねばならぬ。それが卽ち此私學と經世といふ論の起る所以である。

今我日本では政府が學校を經營して、所謂官學主義なるものが盛に行はれて居る。又其學校が足りないからして、益々之を增設しなければならぬと云ふ議論もあるし、又必要にも迫つて居るやうである。併ながら是が必要あるものとしたならば、其必要に應じて增設することが出來るや否や、今の財政の狀態は如何である。現に今日切迫して居る所の財政問題に依て見ても分つた話で、此上國家の公金を以て大學を增設し、專門學校を增設して無限に學生を收容することは出來ないのである。或は時節を待つてやつたならば多少出來ぬともないでもあらうが、併ながらそれより以上學生の增加する方が速い、人口の增加、社會の進步と共に、其必

要が益々殖えて來る併し限りある財政を以てしては到底多々益辨ずるといふ譯にいかぬとは分り切つてゐる。予は決して官學廢すべしとはいはない、又官學增設すべからずともいはない、夫れも至極宜しいが、奈何せん之を限りなく增設し、限なく擴張して行くとは國家の財政が許さない、さう〳〵稅を取ることは出來ない。若し學校の方にそれを使はうと言へば、軍艦を造らふとか、師團を增さうとか樣々の說が起つて、縱令今日の文部省の權力を二倍にした所が、出來ないと云ふことは分りきつて居る。然らば如何にして此困難を救ふかと云へば、言ふ迄もなく私立の經營に待たなければならぬ、又有志者の力に依つて學問の道を開いて行かなければならぬ、又有力者は之に助力すべきは當然の話である。

現今歐米の優等なる國々では、英米を始として、私立主義を以て盛にやつて居る、國家の經營に係るものもあるけれども、私立の大學には到底及ばない。露國の如き最も忌はしき官學一偏のものは別として、佛伊の如き、獨乙の如きも、官立は官立であつても、其實段々獨立の質を備へて來るのである。我國の官立學校も能ふべくんば獨立せしめて、今の狀態を脫せしめたいのである。予は常に、官私兩學兩存すべし、若し官學衰ふるとあれば、私學益々盛ならざるべからず、又官學益々盛ならんか私學益々盛ならざるべからずと云ふ。何故にさう云ふかと云へば、政治、道德、法律、經濟等の學問に於ては決して一方に偏することは出來ない、若し或は眞誠なる國家主義の理想が實現せられて、國家の政治が或一の黨派とか、或一の閥族の爲めに專らにせらるゝことの無い、理想的時代に至つた曉ならばそれはいざ知らず、今の世の中ではどうしても政治といへば必ず或種族が政權を握る、或黨派が政權を握るといふ事は容易に止まないものである、さうして見れば學問の權力が政治の權力と結び付き、其閥族、其黨派

の都合の好いやうに學校を經營し、都合のよい學說を鼓吹すると云ふことであつたならば、國家の憂は是より大なるものはない。此狀態に於ては、之に對抗する所のものが無くてはならぬ、卽ち私學の興隆である。若しも之がなかつたならば、國家の進步は止つてしまはねばならぬ。此點から云つて形而上の學問界には私學の益々振ふことを望むのである。

而かのみならず形而下卽ち有形上の學問と雖も、日進月步の學であるから、其學說がなか〳〵一に歸するといふ譯に行かない。其の應用的學問、例へば醫學の如きになると、甲の學派で最も有力と主張する治療法も、乙の學派に於ては之を排斥する、或は甲の國に於て盛に用ひて居る治療術も、乙の國に於ては之に反對するといふ事實は、今日歐米各國の狀態に見ても、又日本の醫學社會を見ても現に盛にあることである。最も正確なるエキザクト、サイエンスとも稱せらるゝ理化學に至つても亦然り、萬世不易と思つて居つた其學理も隨分動搖することがある。近來の出來事はどうである、例へばラヂウムが發見せられて、以來理化學上の根柢が動いて來たではないか。支那印度の古い思想に從て、日本人も數十年前迄は原素は木火土金水の五つしか無いと云つて居つた、所が西洋の日進の學問の這入つて來た時は六十原素といふのに驚いた、が段々增して七十二原素と云ふやうな事になつて來た。或は某といふ有名な學者は某といふ原素を發見した爲に云々と云やうな事を以て大發明として居つた、所が輓近の大發明なるラヂウムの發見せられて以來數多の手數を經れば之が鐵にもなれば金にもなる、何にでも成ると同時に、總ての物が或程度を經て行くと終には皆ラヂウムに歸すると云ふことである。然る時は金銀も鐵も酸素も窒素も何もあつた者ではない。是はほんの假りの狀態に過ぎぬもので、原子でも元素でもない。況んや金屬非金屬の區

別に於てをや。これては從來七十二原素と思つたのが一原素に歸着する、卽ち一原論になつてしまふ。尙想像を逞ふすれば、現今物質と勢力とに區別されて居るけれども、或は物質卽ち勢力、勢力卽ち物質であるかも知れない、さうして見れば學問界の變動も恐しいものである。

併ながら兎に角現に吾々の眼前に每日々々戰つて居る者は何であるかと云へば形而上の學問であるが、倫理、法律、政治、經濟に關係し、また殊に人間の利害得失に直接關係した事となると、縱令理窟が分つて居つてもなか〳〵共理窟に服從しない。師團增設の惡い事は、例へば船が二十五度以上傾斜する時は沈沒すると云ふが如く、兵數が人口の百分の一に達する時は其國は危いと云ふ事は古い時からの定論である、況んや今日の如く軍隊の爲めに未曾有の巨額の經費を要するに於てをや。假りに一歩を讓りてそれ程惡くないとしても、今日の財政を以てしては到底出來ぬといふことは分つて居つても、それを軍人の僻見、軍人の利害から見て、どうしても之を增設しなければ、國家は滅亡すると迄極論してしまふ。

又西洋の諺にも、希望は思想の父なりと云ふが如く、自分の希望から說が生れて、終にそれが眞理であると確信するやうになつて、却て反對者を外道のように思ふ所から、人間の事は決して一方の論に全權を委ぬる譯には行かぬ。さうして見れば此世の中が段々に進步し、國が益々發展して行くに從つて、どうしても學問の樞府たる大學は無論のこと、總て學校といふものは官學も宜しいが、之れに對して私學が振つて來なければならぬ。

今日のやうな文明社會では云ふ迄もない、此事は遙かに進步しない所の德川時代にも、已に自然の必要からして認められた、當時の最高等の學問所として卽ち私立のものが澤山ある。當時の學者がそれ〴〵に學塾

を開いて、子弟を敎へたものである。而かも其學說は、自由自在に自說を鼓吹したる有樣は、如何にも百花爛漫の如く盛んであつた。卽ち純粹の專制政治、武斷政治、將軍政治の世の中で、自己の政府に都合の惡い者は禁じて、全く國民の盲從を强ゆるも、人之を怪まざる時代に於て、殊に政府に最も都合の好い朱子學を奬勵して居つた德川政府の下に在て、尙且つ斯の如くであつた。當時其學問の本家本元は林家であつて、林大學頭といふものが德川政府の歷代の文部大臣とも、大學總長とも云ふべきものであつた。其祖林羅山が家康公に用ゐられてより、歷代の文部大臣として林家が世襲し續いて居た。其傍に種々の私學が開けて、異說紛々たる中にも、荻生徂徠の如きは官學たる朱子學を眞向より攻擊したのである。素より其當時の學問は孔孟の說を唯々祖述する、否祖述も出來ない位、支那の學者の孔子の說に付ての註釋の何れが良いとか、惡いとか言つて喧嘩をするような、誠に卑屈な、小さい、狹いものであつたけれども、其時代に於ては仕方がない。併ながら是すら國家に影響する所は案外偉大なものであつた。

予が此處に一の例を擧ぐるのは、荻生徂徠が四十六義士を罰しなければならぬと云ふ論を唱へたと云ふ事である。予が嘗て鹿兒島に行つた節に、懇親會をすると云ふので、鶴鳴館と云ふ家へ行くと、其處に額が掛つて居るから讀んで見た所が、徂徠の手紙であつた。卽ち義士の處分法に就ての意見を述べた書面である。其文に

義は己れを潔ふするの道にして、法は天下の規矩なり、夫れ四十六士の其主の爲に讐を報ずるは、是れ臣たる者の恥を知るなり、己を潔ふするの道にして、其事は義なりと雖ども、其黨にのみ限ることなれば、畢竟邪の論なり、然る所以のものは本と是れ長矩殿中をも憚らず、其罪に處せ

られしを又候吉良氏を以て仇とし、公儀の免許もなきに、猥りに騒動を企つること、法に於て免さゞる所也。今四十六士其の罪を決せしめ、士の禮を以て切腹に處せらるゝならば、上杉の願も空しからずして、彼等が忠義を輕んせざるの道理なり、最も公論と云ふべし。若し私論を以て公論を害せば、此以後天下の法は立つべからず。

元祿十五年十二月二十八日　　荻生總右衞門識

斯う云ふ事が書いてある、丁度仇討の三日後の日附である、素より眞僞は保證せぬが、多分本當だらうと思ふ。是は予が常に言つて居た通りの事が此手紙に書いてあるのである。故に早速その懇親會上て述べて云ふたとは、全く此の徂徠の說が私學の經世上に必要であると云ふ事を證明して居る、何故かと云ふと其當時は朱子學が天下の公學である、官學である、諸藩とも朱子學を以て漢學を修めて居る、其本元たる者は林家であつて、その當時林派の論では、斯の如く主の爲に仇を報じた忠臣義士であるから、是には恩賞こそ加ふべけれ、決して罰すべきものでないと云ふ說を取つたものである。又各大名も、此の如き立派な家來を一人や二人は抱へたい位に思つて輿論全體は義士を賞贊する。徂徠と雖も義士を賞贊せぬことはない、義士の精神の高潔なること、義氣の壯なることには誰しも贊成せざる者はない、然れども天下の大法を奈何せむと云ふのが論據である。その點からして相當の處分を加へなければならぬと主張した、卽ち徂徠派は制裁を加ふべき事を主張した。徂徠の高弟たる太宰春臺の如き、室鳩巢の義人錄を評して、室氏にして義理を辨せざること斯の如し、況んや世の職々者流をやと云つて居る。それで徂徠派の說は柳澤の容るゝ所となつて、將軍に上つられたので、將軍は之を是認された。嘗て報知新聞に出て居つた史料の中にも記載してあつたが、輪王寺宮卽ち

上野の宮樣が將軍家へ義士の爲めに命乞ひを遊ばされた(坊さんだから)すると將軍は、如何にもそれは尤もな次第であるが、併し政治を執る身は其一段に至ると誠に心苦いものである。苟くも天下の法を犯した者は相當の仕置をせねばならぬと答へられた。すると宮樣も誠に大樹の賢慮の通りである、義士といふ者も、今日は心が張つて居るから宜しいけれども、これが長く時を經ると、今のやうな譯に行かぬから、中には此立派な義士の名を瀆す者も出ぬとは限らぬ、寧ろ今日相當の仕置をされた方が國家の爲にも宜からうし、本人共の忠義の名を後世に遺す爲にも、宜しいと云ふことを仰しやつたと云ふことである。近來でも、例へば日清役に玄武門を開けたとか、又露國皇太子を大津の御遭難の時に御助け申したとかで、勳等其他恩賞を貰らつた者もあつて大好評であつたが、後には時々新聞種を蒔いて、今日はどうなつて仕舞つたか分らない。素より是等を以て元祿の忠臣義士に比するは當を失した話であるが、輪王寺宮の仰せられたのは此邊の意味もあつたのであらう。又徂徠先生の義は己を潔ふするの道である、忠義は武士に大切であるが、併ながら國家の法に於て是れは私の事であるから、私論の爲めに公論を害して國家の大法を忽諸にしたならば、今後の天下はどうなるか分らぬと云ふたのは千古の卓見である。何故なれば一たび之を許せば、則ち政府が復讐を公認することになる、淺野の四十六士だけを許して、他を許さぬと云ふ譯に行かぬから、隨所で敵討々々といふ事を盛んにやり出したならば何うである、將軍の膝元たる江戸は修羅の巷となるのみならず、全國の禍亂を釀すと云ふことになる。是が卽ち官學に對抗して私學の必要な所以であると云つた事であつた。

尤も或時代に於ては復讐といふことは無くてはならぬ。家長政治の

時代に、甲の家が乙の家から云々の害を受けた場合に、どうしても復讐が唯一の制裁である。前年帝國座でやつたロミオとジユリエツト、なども矢張りイタリアのベンデツタ卽ち復讐である。ベンデツタは伊太利の名物で、シエクスピーヤの劇にも幾らもある。併し日本の敵討といふものは伊太利のベンデツタなどより遙かに高尙な點に發達したものである、矢張武士の美風として長く誇ることの出來るものであるけれども、併ながら或程度を超えた所の時代になると、最早此復讐主義といふものは不用に屬する。而して法律の制裁に依らなければならぬ事となる。私裁の必要がなくなつて、公然たる法律の制裁に俟たなければならぬ事となる、それを破る者は假令義の爲めと云ても、國家の治平の爲め赦すことは出來ない。是は則ち家族主義から國家主義に移つた以上、各個の私裁は許さないと云ふ事でなくてはならぬ。日本も德川時代になりては、尙封建てはあるけれども、餘程中央集權になつて、半ば既に封建の精神を失つたと云つても宜い、皆中央の命令の下に服從して國を立てゝ行かうと云ふ時代になつて居つたから、法律の勢力は强くなりかゝつて居つた。偶々古代の遺物たる復讐といふ事が此時代に現はれて、それが如何にも立派な形に於て現はれ、又當事者たる人物の立派な事は萬世の後までも光明を放つのであるが、奈何せん其時の國の秩序とはどうしても合はないと云ふ事から、當時の官學者流に反對して、徂徠は一箇の見識を立てゝ之が制裁論を大聲疾呼した、其影響は後世にまで及んで偉大なるものとなり、是から以後益々天下の御大法は重いものであると云ふ思想が國民全體に波及して、如何なる事があつても法を犯しては成らぬ、國の法度を守ると云ふ事が國民教育の大精神となつた。

まづ是が德川三百年の泰平を保つ基であつたが、德川の運命はどうな

つたとしても、日本の國民に法律を尊重するの念を馴致し、所謂ロー、アバイディング、ビーブルとならしむることが出來た。此精神の有ると否とが今日文明國として存在し得るか否やといふ問題になる。歐洲でも昔時盛んであつた國はスペイン、ポルトガルの拉典人種、今日盛んな者はアングロ、サクソン人種である。伊太利、西班牙にベンデッタが多いのでも分かるが、西班牙人等の個人的勇氣は豪い、併し法律を重んずるといふ念は甚だ乏しい。其例を擧げんか、ジブラルタル邊に行くと、ジブラルタルとアルガシラといふ處と對立して居る、アルガシラは西班牙領、ジブラルタルは英國領、其間に一の中立地を置かれて、恰度日比谷公園位の大きさの地面が、英國でもなければ西班牙でもない中立地である。其の中立地を渡つてジブルラルタルに行くと、社會の狀態がまるで英國流で、非常に勤勉なる狀態が見える。又アルガシラの方に行くと、誠に懶惰の有樣である、

其處て西班牙人が此土地柄を利用して、脫稅を計り密輸入をする。全體の國民が法律を重んずる精神に富んで居つたならば、斯う云ふ事は出來ないが、唯番所の目を遁れゝば宜い、社會全體の者は密輸入者を咎めるどころでない、賞讃する。是も一種の勇氣が無ければ出來ない事だらうが、甚だ惡い事である。周圍の監視を免れ、役人の目を忍んで品物を運び込むと、豪い奴だと云つて賞められる。役人の監督といふものは、さう綿密には行かぬ、法律の行はれると云ふことは、役人や巡査が監督する外に、人民全體が法律の實行といふ事に援助するから、法律が行はれる、法律を犯した者は人民全體が擯斥するといふ事があるから、巡査の監督も行はれる。此の如く法律を重んずる念慮の無い西班牙は益々いけなくなり、文明社會に立つことが出來ない、中古はえらかつたが今日はいけない。英國になると全く其の反對である。英國人が法律を重んずる事は非常に

えらい、あの廣いテームス河にシガレット一本捨てる人は無い。テームス河の上流に船に乘つて遊びに行て、若しシガレットの喫さしを一つ棄てんか、決して許さない、船人が何里の下流迄下りてゞも是非それを拾つて來なければならぬ、大變な事をして呉れたと云つて大騒ぎになる。と云ふのはテームス、コンサーバトリと云ふものがあつて、此河の純潔を守つて、河を汚さないと云ふ規則がある、それを犯すとは警察官に於ても無論許さない、若し見付かれば非常な罰金を取られるが、縱令警察官が居らぬても、法が定つた以上は決してやらぬ。又魚の保護期があつて、何魚は何寸以上にならなければ捕ることが出來ないといふ規則がある、若し其規則より以下の魚が釣れたならば、必ず元へ戻して置く、それが卽ち法律を重んずる所の精神に富んで居るからである。總ての事が此通り行くから社會の事が都合好く、國は益々良くなると云ふ事になる。誰一人見て居る者がなくても必ず守る、社會全體がさうなつて始めて國は興隆する、西班牙のやうに匹夫の勇に誇りて、法を守らぬ國民は衰へると云ふことになる。卽ち義士が如何に精神が美であつても、國の法に背いた以上は許さぬと云ふことにした爲に、三百年の太平を保つことが出來、維新後になつて益々其精神が發展して、此國はどうしても文明國の例に倣つて法律を以て治める、憲法を以て政治の規約としなければならぬ、法治國といふものに爲なければならぬと云ふので、憲法卽ち天下の御大法に依つて經營せらるゝことになつた。東洋に憲法政治は行はれない、と西洋人は言つて居つた。又其憲法が行はれるのを見ると、日本といふ國は不思議な國で、西洋が三百年もかゝつてやつた事を僅か三十年でやつた、不思議な國民であると云つて、譽める者は非常に譽め、又謗る者は、あれは猿の人眞似で、一皮剝ぐと元の木理椀だと云つて居る者もあるが、何れも其當を

得ないのである、決して是は三十年四十年で出來たのではない、又一皮剝げば馬脚を露はす所の人眞似でも何でもない、數百年の前から既に素養があつたからである、さうして長い太平の間にそれを馴致し、王政維新以來明治天皇の御盛德と御宏謨の下にそれが益々發揮したのである。併し今日でもまだ憲政有終の美どころではない、隨分遺憾な事がある、卽ち軍人跋扈の結果、必要でもない師團を增設しやうと云つて、駄々を捏ねると、抑へることが出來ないと云ふやうな厄介な國情である。併ながら是も大分進んで來たところがある、若し數年前に今のやうな問題が起つたならば、アヽそんなに陸軍が言ふならばやらして置けと云ふて、疾うにあの師團增設案は通過したに相違ないが、今日は陸軍對國民といふ有樣である。まづ各新聞雜誌は筆を揃へて攻擊する、隨つて國民の輿論は今日の財政窮乏の際に方つて徒に陸軍々人の勢力を加ふるのみ、國家の勢力を減ずる政策には贊成せぬと云つて反對して見ると、さしもの陸軍もさう無闇に鐵砲擊つてゞもやると云ふものは有りはしない、もう一歩進んで斯る暴論を敲き潰さうと思へば、國民の奮發で夫れもやることが出來る。さう云ふ元氣を益々國民に付けて、何うしても憲法の章條に從つて國政を行はなければならぬ、獨り軍人に限らず、教育家でも實業家でも、一部分の者が全體の利害を顧みず、自己の慾望を達すると云ふことは憲法國に於ては許されない事と成らなければならぬ。それを若し或論者の如く憲法を間違て解釋する曲學阿世の者流に反抗して、憲法論、經濟論、軍備論といふ樣なものが研究せらるゝ機關が無かつたならば、國は衰亡するより外仕方がない、それを爲す所の任務は何れにあるかと云へば、卽ち私學である、是が予の私學と經世との關係を論ずる所以である。

官學私學

官學私學と云ふのは妙な區別であるけれども、近來は能くさう云ふことを耳にするから、假にその區別があるものとして、さて、全體何を官學と言ひ、何を私學と謂ふかと云ふと、先づ租稅の金を以て立つた所の學校を官學と云ひ、租稅の力に依らずして、學生の拂ふ所の金と、有志の醵金に依つて維持する所の學校を私學と云ひ、又其學問其物をも斯う云ふ風に區別して居るのであらう。勿論斯る區別は後には無くなるであらう、何時までも官だの私だのと言つて居る譯はない。

所で斯う云ふ問題が起つて來る、全體學校と云ふ者は一の役所の如きものであるか、或は家庭の如きものであるかと云ふ疑問が起つて來る。成程或る學校は總て規則に依つて經營し、法律に依つて進行し、又夫れ夫れの任命されたる人が自己の役目を守ることに依つて總ての事が行はれて行く、斯う云ふ學校は、是れ一の役所の如きものである。併し之に反して規則とか、法律とか云ふやうなものに依らずして、師弟の情誼や、有志の共同心に依つて成立ち、其間に於て學を勉め、德を磨くと云ふやうなものは、是は家庭の如きものである、斯う云ふ區別が自然付く譯である。併し學校は何れかの一方に偏しなければやれないと云ふ者でもないが、成るべくは家庭の如くありたいものである。役所の如くなりたくないと思ふが、學校が大きくなり、學生の數が多くなるとどうしても規則に依つてやつて行かなければならぬ。然るに我慶應義塾の如きは素と家庭的の組織を以て成立つたものである、師弟の情誼を以て成立つたものである、其規模の增大昔日の數十倍に至つた今日に至つても、尙其風を存して一種獨特の學風が行れて居る。併し是が其一面に於ては法人として一

定の定欵と云ふ憲法や、規約が出來て、學校の立法行政等に關する機關が作られ、之を又た選擧するとすれば、出身者中どう云ふ資格の人が選擧權を持つて居るとか云ふやうなことが起つて來て、此邊が稍々國家の如きものになる。是れは學校が大きくなつて來ると、自然の成行上已むを得ない所で、其の結果家庭の如き性質もあれば、國家の如き性質もある事となり、此兩面を兼備して來ることになるのは是は自然である。而してそれが最も健全なる發達であらうと思はれる。

又もう一つは、學校は智識を授け、書を讀み、理を講ずる所であるか、或は人格の修養を勉め、品性の陶冶をなす所であるか。卽ち單純なる學問所であるか、將た人物養成所であるかと云ふ疑問が起つて來る。之に就ても學校では學問さへすれば宜い、智識は飽までも廣く、學問は飽までも高尙の點まで仕遂れば宜い、其以外のことは少しも目的として居らないと言つて、純粹に學問ばかりを目的として居る所がある。又さうでなくして、學問には左程重きを置かないで、人格の養成、品性の陶冶と云ふこと、所謂人を造ると云ふことの上に專ら心を用ゐて居ると云ふ所もある。是は外國の例を見ても、兩方ともある樣だが、是も一方にのみ偏して、他の一方は棄てゝも宜いと云ふものではない、學を勉むると云ふことゝ、德を修むると云ふことゝは互に幷び立つべきものである。學問は飽まで學ぶ、それと同時に德を積み、人格を高める、所謂知德を兼備した方が宜いのである。我慶應義塾の如きは無論一方に偏する積りではない、知德共に兼備すると云ふことになつて居るけれども、學校に依つてはさう行かぬ所がある、敎場に於てはいろ〳〵高尙の學理を敎へるけれども、其以外のことは少しも構はぬ、否な事實に於て構ふ事が出來ないと云ふ仕組のものもある。又小さな塾のやうなものになると、師弟の關係が最も親密で、人

を造ると云ふ方には便宜が多いが、いろ〳〵の學問の講義をするとか、澤山の講座を設くると云ふことは出來ないから、知識の方は此學校では十分に進めることが出來ないと云ふ仕組の所もある。さう云ふ所では知識と云ふ者はどうしても他から取つて來なければならぬ。幸にさう云ふ學校が大きくなり、資力が出來て來ると、學問の方も遺憾なく勉めることが出來、其上に人格の養成、品性の陶冶と云ふことも出來るから、やはり知德兼備と云ふことが出來るのである。

偖て以前の問題に立返つて、國家たる性質と、家庭たる性質とを結付くることが出來るならば、知育と云ふことゝ、德育と云ふことゝは二つの問題のやうではあるが、其實一ではないかと思はれる。而して官學と云ひ、私學と云ふ二種の者があるとしたならば、是は孰れが宜いか、若し一方が宜くて、他の一方は惡い者であつたならば、其惡い者は廢して了つて、良い者の方を益々發展せしめたならば宜からうと云ふのも尤な話である。

そこで、小學中學位までの所謂普通教育は、是は國家若くは地方公共團體に於て經營しても宜いが、其れ以上の高等の教育若くは專門教育になれば、官學は宜ろしくない、私學を以てやつて行くのが宜ろしい、私學を益々發展せしめて、官學は撲滅すべきものである、官立大學の如きは要らないものであると。斯樣に論ずる者がある。又之に反して、私立の學校で學問をすると云ふことは宜ろしくないとてある――どふ云ふ點が宜くないかと云ふことに就てもいろ〳〵議論もあらうが――、兎に角大學と云ふものは、是はどうしても國家が經營すべきものである、私立の大學を立てると云ふことは間違つた考である、故に高等の教育に就ては總て官立の學校のみで爲すことの出來るまで規模を擴張して行つて、私學は成るべく消滅させねば可かぬ、出來るならば直に之を撲滅するが宜いと云ふ

議論、所謂私學撲滅論もある。此の如く區々の論者がある、何處にあるか知らぬが必ずあると思ふ。卽ち官學派と私學派と云ふものがあるであらうと思ふ。併ながら是は雙方の理想として各々道理のある事だが、之を實際に直行せんとするは不可能な議論である、凡そ物が存在する以上は存在する理由がある。又存在する爲の利益と云ふものがある。德川家康の遺訓に凡そ五十年以上存續したものならば、どんなものでも決して潰すなと云ふことがある。學校の如き善良の目的を有する者は申すに及ばず、假令醜惡にして、有害無益と認めらるゝ者と雖も、尙且つ然りである。例へば博奕と云ふものは惡いものに違ひない、娼妓々樓と云ふものも決して善いものではない、正面から見た丈ではどちらも言語道斷に惡いものであるけれども、若し長き前から根をはやした場合には、急激に之を世の中から取去つたならば、其取去つた利益よりも、之より生ずる害惡の方が多くて、甚しきは社會の治安を破り、秩序を紊すやうなことが起つて來る。

博奕の大なる例を擧ぐれば外國の競馬の如きはそれである。英國の如き競馬の盛なることは非常な者で、大貴族と云ふやうなものは皆競馬の熱心家である、先帝の如きも皇太子時代から非常な人望家であつたが其理由の一は競馬に非常に熱心せられたからである。曾て殿下はバーシモンと云ふ名馬を御持ちになつて居られた、其バーシモンが競馬に勝つた時抔は、大勢の人が雲霞の如く殿下の觀覽席の前へ打寄せて、百雷の落るが如く喝采した。又先年ロウスベリー卿が總理大臣になつた時の好評に就て三つの原因があると云はれた、其一は深い學問のある、誠に高尙の人間であつたといふこと、其二は亞米利加の金滿家から其細君を貰つて、金融が善く付いて居つたこと、最一つは競馬が好きで、其持馬が競馬に

勝つた爲に人氣が引立つたと、夫等の爲に總理大臣になつたのだと云ふ話である、それ位英吉利では競馬が流行して居る。所が此競馬と云ふ者は隨分惡いもので、競馬に熱中したが爲に巨萬の身代を一朝にして失つたと云ふ樣な人が澤山ある、又其結果發狂する者があるかと思へば、自殺をする者もある。其害の及ぶ所が隨分多いのであるから、隨て其廢止論も盛であるが、併しなか〳〵廢することは出來ぬ。殊に宗教界の熱心家はどうも競馬と云ふものは善くないものである、社會の風教を害するものであるから、廢して了はねばならぬと言つて居るが、中々行はれそうにもない、若し又之を廢したとして考て見ると、差當り困ることは百萬人ばかりの人が食へなくなる、競馬の爲に衣食して居る人間が百萬人もあるから、競馬を廢すると差當り是等の人は何をして宜いか分からぬと云ふことになる、隨つて社會の平和を害することになる、故に競馬の害も恐ろしいが、又それを廢めた爲めの害はより多く恐ろしいものである。乃ち世の中に或るものが長く存在した以上は、必ず其存在の理由がある、隨つて又存在の利益もあるに違ひない。

是は極端な一例として、さて本論に返りて學校の事になると、例へば官學と云ふものは甚だ惡いものだから、斯の如き者は全廢すべしと云うやうに言ふ者もあるであらう。又私學は有害無益なものだから、斯の如き者は撲滅すべしと論ずる者も無いでもない。併ながら是れも雙方共に必ず存在の利益があり、又をの〳〵其發展すべき運命を有つて居るに違ひない。左れば官學と云ふもの、又私學と云ふものも、共に社會の要求、社會の需要に應じて出來て居るものであると云ふことは明かである。若し假りに社會を一個の血液が通つて居る有機體であるとすれば、其の有機體（オルガニズム）に於て各一の機關になつて居る以上、必ず社會の生命と結付いて、共

通の離る可からざる關係のあるものであるとは明である。假令一本の指でも全身の上に關係して居るから、是が取り去られたならば矢張全體の調節を害する。漸次の變遷ならばよいが、急激に、人爲的に存廢を決するような極端の議論はどちらも間違つて居ると言はねばならぬ。

又國々の狀態に依りて官學の重きを爲して居る國もあれば、私學の盛に行はれて居る國もあるが、大體に於て國の程度の高いものに於ては私學が發展し、國の程度の低い所では官學の力に俟つことが多い、又此外に以上の如く急激に官私何れかの一方を偏廢する程の論でなく、當分は兩方とも必要とする論者の內にも矢張り二派ありて、官學の設備の完全するまでは私學に依つて之を補ふべきものとして、恰かも私學は官學の完成迄の補給物であると云ふ樣に考ふる人もある。それに反して今は私學發展の過渡の時代であるから、私學の完備するまで官學を以て補充すると云ふ說もあるが、是等は雙方共間違つて居る。予の考では甲が盛になれば、乙もそれに伴つて盛になつて行くやうにならなければ大に害を及して來ると思ふ。今假りに日本に於て私學の方が盛であるとしたならば、官學も亦同じ位に盛にしなければ可ぬ、又官學が盛であるとしたならば、私學も同じ程度に盛にしなければ可ぬ、雙方常に對抗して行かなければ可ぬ。凡て物は平均を失ふと必ず害を生ずる、故にカウンター、バランスと云ふものが無ければ可ぬ。一方は重く、一方は輕いときは忽ち平均を失つて轉覆する。提灯に釣鐘では行かぬ、況んや其一方が全權を獨占するをや。

一元の專制は百難の本である、有形無形の差別なく物皆然り。宗敎に於て然り政治に於て然り、社交に於て然り、學問に於ても亦勿論然り。

學問に於て一流一派のものが全權を握ると、其間に言ふべからざる弊

害が生ずる、物事が停滯すると腐敗する。少くも二者互に相對抗し、競爭し、拮抗して行くと云ふことが必要である。それに就て面白い一の例話がある、それは政治上の事であるが殊に予に興味を與へた者である。日本が議會を開いた當時の有樣は民黨とか吏黨とか、言つて非常に軋轢したものがあつた、政治上の反對者は政治以外のことにも互に遺恨を搆へて、甚しきは骨肉相食むと云ふやうなことになり、甚だ困つた者だと識者の窃かに憂慮する所であつたが、予は丁度其當時洋行して英國に於てそれと全く反對の政治的現象を目擊した。それは故ヴキクトリア女皇の卽位六十年式が非常に盛大なる儀式を以て行はれた時のことであつた。當時國民が女皇陛下に頌德表を上つたが、其の頌德表を上る時の儀式は如何にして行はれたかと云ふと、國民を代表する者は衆議院であるから、衆議院議長が御前に出て頌德表を上つたのであつた、其時には衆議院議長束帶の禮服は長い裾を曳ずるのであるが、其裾を持つ人が頗る面白い、其右の方を持つ者は時の政府黨の院內首領卽ちバルフォア總理で、それから左の方を持つ者は誰れかと云ふと時の政府反對黨の首領卽ち在野黨の總理ハーコートであつた。保守黨と自由黨と兩黨の代表者が持つたのである。是は單に一遍の儀式に過ぎないことではあるが非常に面白いことと思ふ、何となれば此儀式は英國憲政の大に發展したる有樣を示したものであるとも見ることが出來る。全體憲法政治とはどんなものであるかと云ふと、甲の政黨が勢力を得た時にはその政黨が朝に立つて政權を握り、乙の政黨は退いて野に下る、又乙黨が勢力を得れば甲黨に代つて朝に立つ、此の如くにして兩黨代る代る政黨內閣を組織し、朝に立つ者は政治を行ひ、野に在る者は之を批評する、つまり政を行ふ者と、政を批評する者との二つに分れて居るのである。それであるから兩

々相俟つて初めて良い政治が出來ると云ふ理窟なのである。若し夫れを何れか一方が永久に政權を獨占したならば、決して良い政は出來ないのみならず、種々の弊害を生ずるのである。故に英吉利の憲法上の語に天皇陛下の政府と云ふ語に對して、天皇陛下の在野黨と云ふ語がある、只聞くと妙に聞えるが、政府黨のことを天皇陛下の政府黨といひ、其反對黨の在野黨のことをやはり天皇陛下の在野黨と云ふことは餘程面白い語であると思ふ。なぜなれば天皇陛下から見た時には兩黨とも政治上の必要機關である、甲黨が政治を行ふ時は乙黨が其缺點を批評する、又乙黨が政治を行ふ時は甲黨が其缺點を批評する、乃ち兩々相俟つて政を完全に行つて行くことが出來るからである。即ち兩黨の對立は憲政と云ふ車の兩輪の如きものである、決して其の一方を偏廢することが出來ぬ。所謂憲政有終の美と云ふやうなことは人の理想に依つていろ〳〵違ふだらうけれども、是位の程度にまで進んだならば、稍々有終の美に近いものと言へるであらう。

是は政治上の例であるが、之を學問上の比喩として考て見ると、官學は學問のトレースの右を持つならば、私學は其左を持つ。兎に角兩々相對し、相依て學問をして眞理の前に近づかしむると云ふことが、是が即ち學問上の約束でなければならぬ。左れば所謂私學撲滅論も間違つて居れば官學全滅論も間違つて居る。又官學の完全の域に達するまで、私學を以て補充すると云ふ論も間違つて居れば、私學の完備するまで官學を以て補充すると云ふ論も間違つて居る。是はどうしても官私雙方共に發展するやうに、即ち官學が一歩を進めたならば私學も一歩進めるやう、私學が一歩進んだならば官學も同じく一歩進む樣、共に等しく日本の學問であるから、期する所は學問の獨立と云ふ理想に向て進行し、租稅の金を

以てやるのであらうが、或は寄附金でやるのであらうが、そんなことには構はずに、日本人の精神を練磨し、日本人の學問を進めて行つて、世界の思想界に濶歩し、邁往し段々學問上の發明も日本から出るやう、學問上の理論も日本から出るやうにするのが學者の目的とすべき所であらうと思ふ、是が至當の議論でないかと思ふ。

腦充血の國家

今の爲政家のする處を見ると恰かも國家の健全なる進歩を碍げて、却て強て不具畸形の民を造らずんば止まない勢を示して居る。

我國は古來異邦の文明を攝取して、之を咀嚼し、發展せしめたことは爭ふべからざる事實であつて、殊に明治維新後僅々三四十年間に泰西文化の長所を採擇適用したる消化力の尋常ならざるは、唯だ偏へに我ながら嘆賞するの外はない。

併しながら現代の日本は尙進歩の階段に於て未だ甚だ高からず、故に決して輕々しく樂觀するを許さぬ。富の程度といひ、生活の狀態といひ、教育、學藝の缺陷など、之を歐米先進國に比すれば、寧ろ大に憐れむべき狀態を脫し得ないのである。就中予輩は玆に時代の最大病弊として、官權主義の思想を論破せざるを得ぬ。

凡そ官權萬能の妄想、官尊民卑の痼疾は國家の健全なる進歩を碍げ、强ゐて不具畸形の民を造らずんば止まない者である。いふまでもなく國家は國民の國家にして、政府の國家ではない、故に官權獨り重くして民衆之れに追隨するに至らば、國家は遂に滅亡の外は無いのである。現に土耳其の如きは其の好例であつて、政治家は單に官權を弄び、青年は官府に衣食し、而して多數の國民は唯だ是等官吏の虐待をのみ受けつゝ、之に食

物を給するのみである。

先づ吾等は近時世に喧しき官業熱に就て見るに、是れ恰も一種の變則的國家社會主義を實行せんとするのでなからうかと考へられる。若し是をしてある學者が唱導する理想的國家社會主義に準據するものならしめば、其主義に忠實なるの故を以て、吾等は多少の假借する所あるも、現時の官業論者は唯稅金を增收せんが爲めに、民間に有利なる事業あれば之を奪い、强て之を官府に收攬し、以て益々官權を張らうとするのである、卽ち國民の負擔を輕からしむる目的でなくて、民業を傷ひ、民利を奪ふ變則的國家社會主義、言ひ換ふれば國家の假面を被れる吏權主義の實現に外ならぬと云ふも辯解の辭なからんと思ふ。

政府の事業は公共的利益を計るを目的とせねばならぬ、國家として必要であるが、個人的事業として不利益なる場合に止むを得ず、官業となすは至當であるが、現に民業として經營し充分の收益あるものを奪ふて、官業とするは非理不法たるを免れぬ。然かも鐵道の如き若し官業に爲つた結果として、運賃を輕減し、速力其他の設備を完全にするならば、或は尙ほ恕すべきも、事實は正反對に、却て民業當時より劣惡となるは、今日迄の經驗に徵して明瞭である。

若し又國家の歲入の不足を補充せんとならば、此方針に據るよりは寧ろ益々民業の範圍を廣くし、各種の民業をして盛んならしめたが可いではないか、民業を保護し、奬勵して其收益を多からしむれば、國家の歲入又從て增加するは必然の理である。

然るに今其有利の民業を官業に移すの結果、唯だ增すのは官吏ばかりで、此儘に進んで行かばこれまでの資本家は皆單に公債所有者となり、國民は爲に有爲の氣象を消滅して仕舞ふの外はない、實に世に茶毒を流す、

之より甚しきものなからんと思ふ。今特に之を教育上の方面より觀察する時は、尙更に甚大の通弊を認むるのである。

一般の人士は日本の教育界を樂觀し、非常に發達したと云つて居る。學校の新設、學生の增加等を見れば、最近十年間寔に長足の進歩を呈したと云ひ得られるであろう。然し退て仔細に其內面の事情を熟察する時は、寧ろ意外なる結論に到達せざるを得ぬのである。卽ち近時の教育現象は概して病的傾向を有して居る。人爲的に、不健全なる教育を普及奬勵して居るのであるから、未だ眞に大なる進歩を遂げたとはいへない。

試みに各學校に附與せられたる徵兵猶豫の特權を廢し、又た大學其他の官公立專門學校に與へられつゝある各種の特典を除き去れ、而して後に學生の應募數を稽考し來れば、果して今日の如き盛況を維持すと信じ得らるゝであらうか、予輩は斷じて之を信じ得ないのである。故に現今教育の進歩せるが如き觀あるは、政府が徵兵其他に關する特典を餌として、人爲的に學生及其父兄等を釣つて居るのである、人文發達上自然に盛んになつたのでは無い。寧ろ唯だ病的に盛觀を呈して居るに過ぎないのである、甚だ其不健全なるを憂へなければならぬ。

而して這般徵兵令其他の特典を各學校に與ふるものは、卽ち官權を有する政府であつて見れば、教育上に不健全なる結果を來たしたのも、又官權主義の弊害と云はねばならぬ。されば余輩は教育界を刷新せんが爲めに各學校を通じて同時に依估の沙汰なく一切の特典を廢せよと主張するの必要を感ずるのである。

次に教育上に於ける官權主義の弊竇は、學生の改良に非常なる妨害をなして居る。前述の如く徵兵の猶豫、中等教員の認定等を楯として、政府は全國の中學又は高等專門學校に對し極端なる干涉を試み、一糸一毫の

假借をも與へない。之が爲めに學科の編成等に就き、多少の新案を實行せんとするも、到底其餘地なく、從て絶對的に改善を施すことを拒まれて居るので、其形式的規則的、制裁の下に機械的教育を强制されつゝある有樣である。

固より或程度までは當局者が全國の各學校を監督指揮する必要はあらうが、現今の如く殆ど絶對命令の下に、一定の教育を强ゆるは人智の開發を無視した遣り方と云はねばならぬ。且當局者の所謂學則も最初より完全至極せるものにあらざるは、啻に世上の識者の唱ふるのみならず、當局者も亦自から之を認めて時々に變更して居るのである。政府獨り其改易を可能とし、然かも各學校の當事者に何等改善の餘地を與へないのは專擅である、矛盾である。これ卽ち官權主義の弊害にして、彼等は其官權を張らんが爲めに、各種の特典を振り舞はし、反て教育の進歩を阻碍しつゝあるを悟らないのである。

此の如く官權を楯にして他をして改良刷新の方法を講ぜしめないといふのは學校の爲め、教師の爲め、亦た學生の爲めにも大なる損耗を招かしむる所以である。この煩瑣なる形式主義を去り、自由に、活潑に各學校の特長を發揮せしめんには、先づ各種の特典を全廢すべく、而して其所謂特典を附與すと誤想せる當局者が根本的觀念(卽ち官權主義の思想)を一掃しなければ、到底健全なる眞正の教育は振ひ興るものでない。

上述したる如く、當局者が荐りに其官權主義を尊重しつゝあるは、自から政府を萬能視せる結果である、言ひ換ふれば、官府は智識の首府なりと盲信せるが爲めである。思慮なき一般の人士が種々の規則や、制度などに支配されて、小さな桎梏の下に束縛の苦しみを感じて居る者に對し、特絶の權利を擅まゝにせしむることは、決して國民の名譽でも、利益でも無

い。現に眞骨頭ある人物は多く去て、民間に自由の位置を得て居るのて官府に戀々たるものは寧ろ常に第二流、第三流の人物に多い、服務規律と、官等と年功加俸を金科玉條視して居ることが、既に官吏其の者の性格を現はして居る。小數の官吏が多數の國民より知識優等なりと思ふは滑稽の極てある。多くの政府事業が民業に比して毫も進歩した點の無いのを見ても、官權主義の謬妄は解る筈てある。然るに今の教育家が皆官府の命にのみ依て動き、滔々相率ひて益々官權主義の惡弊を助長せんとするは、我が文明の最大缺陷と云はねばならぬ。

前に學生增加の現狀を見て、不健全なる教育の進歩と云つたが、之と關聯して卒業生就職問題が論せられて居る而してこれは不健全なる教育の弊竇を呈露せる一事例と認むべき者に外ならぬ。自然に發達したのてなく、人爲的に教育の進歩を促した結果、多くの學校卒業生は現に職を得るに一方ならず苦しんて居るといふ始末てある、是れ畢竟官權主義の思想を脱せぬからて、卽ち彼等卒業生の多數は官權主義に過られて、先づ官吏となり、或は官吏に似たる職業を求めやうとのみ焦つた結果てある。云はゞ座して喰はうとする人間が多いからてある、限りある官府の位置又は同種類の業を得るは容易てない。故に同僚を排斥し、先輩を傷つけ、些細の位置の爲めに醜き競爭を行ふを耻としない。各種の特典を得るを第一の目的として學に就ける、當今の卒業生に此惡弊を生ずるは、官權主義の教育を强ゐた當然の結果てある。

吾等の見る所によれば彼等卒業生が其職業を求むるに、常に座食的根性を脱せぬことが抑も大なる間違と思ふ。教育を受けたるが爲に官吏となり、教育家とならねばならぬと云ふ要約は無い、之と同じく中學乃至大學を卒業したればとて豆腐屋や、百姓を營まれぬと云ふ理由も無い。さ

れば彼等にして自立的精神だにあらば、職業の無い筈は無いのであるが、唯其座食的根性の失せぬ爲めに、斯る問題を惹起するに至つたのである、等しく商店といひ、農家といふも教育あると、無きとは必らず多大の差を生ずべく、而して百般諸藝の進歩は此教育ある人物に由て遂げられるのである。然るに多數の卒業生が是等の職業に就くを好まずして、偏へに座食的位置を熱望するは、其罪や官權主義の思想に養成せられたる時代教育の惡影響に外ならぬ。

要するに予の時代觀は無暗なる官權擴張主義を排するにある。此惡弊の存在する間日本文明の進歩、獨立自主の國民の完全なる發達を期し得ないと云ふに歸着する、而してこゝには主として教育上より官權主義の惡弊が如何に其發達を障害しつゝあるかを觀察したのである。

教育界の未來

大凡そ學問には、何れも其ものゝ價値が存して居るから、一概に何う彼うと云ふことは出來ない。例之文學の如き、哲學の如き、物質一偏の眼から見ると實際に迂なるかの觀はあるが、一國の獨立を意味する事とするには、無論其等を發達せしめて、少くとも固有のものとせねばならぬものであるから、直に之れを取つて彼を排するとは出來ぬ。併し我國の現狀より考へ、其最も缺乏して居る者を求めば、富の力が缺けて居る、乃ち貧乏だと云ふことが、誰の頭にも第一に浮んで來るから、世界の列國と對峙し、彼の後に瞠着たらざらんと欲するには、何うしても此富力を充實することを計らねばならないから、教育上今日の急務としても先づ、富を增加する學問、乃ち農商工業の實務的學問を盛んにするの要ありと思ふ、徒らに

空理空論に趨らず、飽迄實際的に、眞面目に實務に携つて、國富を增殖するに專念する樣な人物を作るのが必要であると思ふ。文部省等でも、實際教育と云ふことは夙に着眼して、夫れ〴〵奬勵をして居るが、其多くは官僚の臭味を脫せず、机上に打算して得たりとする遣り方なので、未だ吾人を滿足せしむるの教育を施して居ないので、吾人は特に實務教育の振作を唱道するのである。

去ればとて必しも彼の實業學校を增設せよと云ふのではない、吾人は一歩を進めて一般の教育を實務化せしむるを主張する。現下の學制を見るに小學校、中學校は何れも階梯教育を施すに止まつて、其れ自身の爲めには一も滿足な教育を施して居ない。之れは現下の教育界の大缺陷であつて、詰り極めて少數の大學に入るものゝ爲めに、極めて多數否殆んど其全數の生徒を犧牲にして居るのである、不合理も甚しい、大體教育といふものは其だけで活用の出來るのを要とし、小學でも、中學でも其れを出たらば、夫れ夫れ役に立つ樣に仕上げねばならぬのである。然るに現下の遣り方では無暗に要りもせぬものを注ぎ込んで、遂には何も出來ないものを拵へるといふに外ならぬ。斯く云ふ所以は吾人は別に必要な設備をして置いて、其れが爲めに他を犧牲にするのを避けしめんとするので、乃ち其教育を實務的ならしめんことを主張するからで、何も特別に專門の實業教育を施す迄もなく、可成的科學等實用的の知識を涵養して、獨逸の實科中學の如きものゝ普及を見んとする爲である。

之れは獨逸計りでなく、英米佛に於ても亦然りである、ツマリ學問を實際にし、時代との接觸を保たしめんとするのが一般の傾向である。例令は、古典の研究を止めて近代語を教授すると同樣の流儀だが、顧みて日本の現狀如何と見るに、依然として和漢文の古典教育を施して居るのであ

る。之れを改良せぬ間は、實は手の着け樣もないのだ、是に於てか吾人は敢て普通教育を實務的ならしめんことを主張し、科學の知識を鼓吹して、堅實なる國民を作らんことを欲するのである。

吾人は又校風を樹立するとの必要を主張する。今日の樣に學校は一個無意義な造營物として、金さへかければ拵らへらるゝと云ふ風では、教育の本旨に悖るものだと斷言する、いふ迄もないことだが、教育は天分を就すのを旨とし、短を補ひ長を助けると云ふのを其約束として居るので、現今の如く其學校は何等の主義なく、何等の特色なく、千遍一律、模型で鑄た樣なことをして、學校と工場と混同し、役所と同視して居る樣では、人間を潰して仕舞ふ斗りで、とても人間を拵へることは不可能である。是に於てか吾人は其學校である以上は學校であるだけの意味を持つて居ることを要求する、學校の特色、校風と云ふものを樹立するに足る所の有意義の存在たらんことを要求する。之れは最少限の要求で、之れに應ずることの出來ぬものは學校たる資格がないものであると思ふ。斯くして學校が其校風を樹立し得るや、家庭の風を受け繼いで子弟を薫化してゆき、子弟は其間に個性を發揮して、やがては職業に就き、社會に立ち交はりて、其良風俗に貢献して、此に一個の意味ある國民となる、國家は是等の意味ある國民を抱擁して、各個特有の天分を盡さしむるに依りて鞏固な基礎のある發達を遂げてゆくのである。夫れを知らずに劃一の學制を布き、制度にのみよりて學校を經營して、同一の鑄型に子弟を押し込んで、或る一樣の人間のみを拵へようとする今の教育は禍ひである。吾人は校風の樹立を主張すると共に、是れ等の誤謬に對して、全然反對の態度を持するものである。

如上の見地から、吾人は大に私學の奬勵せらるべき者なることを思ふ、勿

論今日の樣な、意味のない學校ではダメであるが、私學にして苟も其特色を有し、異彩を放つて、校風の見るべきものあらんか、同じ型にのみ傾き易い官學よりは、イクラ生命ある教育を施し得るか知れぬのである、官學といふものは元來貧乏人の學校である、金の無いものが公費で拵へた學校に入つて、タヾで學問をすると云ふのは、國家の制度としては惡いことではないが、苟も餘裕のある者には他の欽尚すべき校風を維持する學校に就いて、自由に教育を受けると云ふことが、甚だ大切な事であると思はれる、然るに現今の制度では何處迄も官學本位で、私立の學校は何んなに善い學校でも代用的のものとしか見て居らぬ、之れは實に亂暴極まつた見方である、教育といふものには特に官臭を加ふるの要がないのである。否吾人は却て子弟の天分を就さしむるに有要な私學の漸次盛大ならんことを希望し、其れを奬勵せんとするものである。

吾人は又現下の女子教育に就ても多くの利と弊を見る、一般婦女子の間に就學の氣風が盛んになつて、新文明の意味に接觸せんとする傾向が起つて來たのは固より愉快な事であるが、今日の樣に其父母の膝下を離れて、妄りに都會にのみ集中し、沒趣味な寄宿生活をして居るのが何の爲めだか、殆んど其旨を領するに苦むのである。夫れは地方女學校の不足にも由らうが、無暗に都會のみに押し寄せて來て、一種異樣な風體迄して、譯もなく女浪人の樣な生活をして、不知不識の間に婦德を累するに至るのは眞に歎惜すべきことである。故に今日の場合、各自其の地位に相應する修養をするのは必要だが、其れにはコンナ不自然な事迄する必要はあるまい、固より吾人は古い考へを繰り返へす者ではないが、婦人が學問をするには出來るだけ父母の膝下でする、其れが濟んだら始めて希望の方に向き、其れに相當な學校に入る、ツマリ都會熱を去つて眞面目に勉强

して、婦德を涵養する、斯くして更に高等の學問を仕度ものは大學へても、何へても入つて善い、學問には性の區別はないから、大學でも門戸を開放して女學生に聽講の自由を與ふべき筈である、杓子定規を振り廻はして、遂には女子大學をさへ造らなければならぬように至つたのは、吾人の採らざる所である。況んや女子の爲めに特別の專門大學科を設くる說の如きは愚の極である。

如何にして青年の元氣を恢復す可きか

今日の青年は如何にも元氣に乏しき缺點はあれども、さりとて或人の云ふ如く、昔のように衣は肝に到る的の粗野の風に引き戻すは吾輩の採らざる所にして、多數の德義を奬勵し、組織的に事物の進步を圖るべき今の時勢に在りては規律を重んじ、秩序を守り、或る程度迄は衣冠をも正し、圓滿に人と接觸する事は極めて肝要である。漫罵放言自ら壯とし、他人の感情を害する言行を憚らざるが如きは文明人士の耻づる所である。

維新時代に豪放不羈の青年たりし先輩が、動もすれば今日の青年の意氣地なきを慨するは、一應尤のようなれども、實は青年が時勢に應じて秩序的行動を執るの順境に入れるを思はねはならぬ。素より勇氣は必要である或場合には蠻勇さへも必要であるが、赤裸々の蠻勇は社會の進步を妨ぐる者にして、蠻勇を包むに文明の衣を以てせねばならぬ、內剛にして外柔なるは一見兩立し難きに似て其の實然らず、本人の心掛次第では剛にして柔を兼ぬるは亦敢て難しとせざる所である。されど今日の青年は餘りに昔日と反對の方向に行き過ぎ、餘りに行末の事に屈托し、之が爲めに元氣を消磨して居る缺點がある。思ふに事の玆に至れるは其原因一ならざるも、文部省の誤りたる敎育方針は正しく一大起因をなして居

るのである。故に青年の元氣を恢復せんとするには先づ以て文部省の學政方針を改めねばならぬ。

今日の文部省の方針は教育界に一つの枠を造り、全國を押し並べて無理にも之に當て嵌めんとするの結果、社會に甚だ不利益なる影響を及ぼして居る。例へば中學課程の如き毫しの變通を許さず、千篇一律に押し通さんとする其有樣は、恰かも全國の子女を驅りて同一模型に入れんとする樣である。例へば中學課程より漢文を除く可しとは、夙に社會の先覺者に依りて唱へられたる問題にして、文部省よりも屢高等教育會に持ち出せるより見れば、之を廢するは文部省の理想なるが如しと雖も、茲に若し卒先して之が廢止を實行する學校があれば、現行の教育制度に牴觸する故を以て公認の資格を剝奪されるのである。此一例は推して全豹を知る可く、其馬鹿々々しさは沙汰の限りにして、究屈も爰に至りて極まれりと謂ふべし。吾輩は敢て現今教育制度の全部を批難する者にあらざれども、教育の事の如きは未だ絶體的完全の方法なき以上は、成るべく は各種の方法を試驗するの餘地を與ふ可きものなるに、文部省が極端なる劃一主義に拘泥して、少しも融通を利かすことなく、拾ひ得べき利益を逸し去りつゝあるは、誠に痛歎に堪へぬ次第である。

佛蘭西は極端に形式を重んずる國柄にして、其最も甚だしき時期に於ては文部省が全國學校の時間割迄も規定し、文部大臣が官房に居ながら時計の針を見れば、今全國の學校にて何々の科目を教授して居ると云ふことを知り得たと云ふとてある。日本は幸に斯程迄に至らざるも劃一の方針を執るは同一の事にて、北海道の寒地も、沖繩縣の熱地も、東京の眞中も、山間の僻地も同一の規則に準據するが如き、其愚實に笑ふに堪へたるものがある。如何なる學校組織、如何なる教育方法が最良なりやは容易

に決すべからざる問題にして、何人と雖も一定不動の劃一方針を以て全國の子女を鑄るべき鑄型を强制するの權威を有するものでない。

社會は複雜であり、人間は樣々である丈けに、教育の機關も亦自ら變通自在なるべきの必要がある。此必要に應じて教育の發達を圖らねばならぬ。然るに徒らに形式に拘泥して、狹き範圍に於て一般學校の資格を定め、世間も亦專ら形式に重きを置き、學生が有する實力の如何を問はず、肩書の如何によりて待遇するが故に、學生も實力の修業よりも試驗を通過するを以て能事畢れりとなすに至つた。斯の如く三者互に原因となり結果となり、詰込みと形式の一方に流れて、其の結果は青年の元氣大に消沈するに至つた。故に恢復策の主要なるものは、文部省の教育方針の改革にありとせねばならぬのである。

學閥大に歡迎すべし

學閥といふものは同學同窓相引援するの作用から生ずるもので、社會に於ける競爭に伴はざるを得ぬ必然の結果である。これは決して忌むべきものでも、亦怖るべきものでも無からふと信ずる。多年同一の學風に養成せられ、同一の趣味を持てる人々が相寄り、相集つて一つの團結を形作るのは、人情の上から言つても至極尤もな話で、何等非難すべき性質のものではないと思ふ。

併し乍ら凡そ何事によらず、總ての勢力が一ヶ所に集注すると云ふ事は、非常な弊害を伴ふものであるから、學閥の如きも成る可く之を多くの數に分つ事が肝要である。官私の各大學を始め、其他何學校でも構はぬから、成る可く澤山な學閥が社會の各方面に勃興せん事を望むのである。

斯くすれば閥と閥との間に自から激烈な競爭が生じて來る。而して其競爭は結局實力を以て相對抗するの外に途無きを以て、同閥中に於ても必要から淘汰が行はれ、各自も亦其刺戟に依つて、層一層奮勵する所から、事業も興れば、國家も榮えると云ふ譯になる。

然るに今日動もすれば學閥存在の爲めに、千里の馬も往々にして槽櫪の間に朽つと云ふ樣な嘆聲を聞くのは、畢竟するに其學閥なるものが二三の少數に限られて居るからである。學閥の間に競爭が無いからである。

一體私情を挾んで、平凡な人間を重用すると云ふ事は、決して永く續くべき筈のものでない。例へば門地に依りて不能の者を樞要の地位に置くが如きは、或る程度迄は繼續するが、いつか顚覆すべき時期の必ず來るは、既に歷史の證明する所である。それは自由競爭の結果である。だから、親しき者が相集まると云ふ事が、人情避く可からざるものである以上、成る可く健全なる學閥を澤山造つて、互に實力で競爭して行く樣になさなければならぬ。そふすれば在來の如き學閥の情弊は自然に打破せられて、其の良き方面のみが殘るに相違なからうと思ふ。

然らば社會の各方面に健全なる學閥を多く造らんとするには、如何すれば可いかと云へば、先づそれには私立大學を盛んにする必要がある。少くとも政府が或る學校に對しては厚く、他の學校に向つては薄いと云ふが如き偏頗なる處置を取ることを斷然排斥しなければならぬ。

凡そ官の力を濫用する程、社會に向つて大なる害毒を流すものはない。殊に我國の如く、官尊民卑の陋習拔けず、官で造つたものは惡いものでも、善き者のように解する非文明の人間の多い所では、最も此點に注意を拂はなければならぬ。而して此の官力を濫用して、自由競爭の圓滑を阻害

し、社會到る處に不自然の現象を見るは、官僚政治の通弊として、夙に世人の顰蹙する所であるが、余は是れ必しも官僚政治に限らないと思ふ。若し今後政黨政治となれば、此の弊が一層甚しくなりはすまいかと寄に疑ふのである。然しそれは餘事に渉るから別問題として云はぬ。扨て日本の現狀では、學校を官で設立經營することは素より必要ではあるが、殊更に私立學校と區別を立てゝ、種々なる特權を之に附與するが如きは、明かに官力濫用の一例を示したもので、間接に國家の發展を阻害するのみならず、實に官立學校其物に對しても、親切の樣で却つて不親切極まるものである。何となれば官立學校の學生をして徒らに政府に對する依賴心を增長せしめ、實力を以て世に立たんとするの氣魄を消耗せしむるのみならず、延てはまた一校內の空氣を腐敗せしむるに至るからである。

今日滔々たる官立大學の卒業生が相率ひて官海に志す所以のものは、健全なる意味に於ける學閥の存在せるが故に非ずして、之れに與ふるに種々なる特權を以てしたるが爲めである。併し乍ら官吏の數には自ら制限がある。國家は善良なる官吏を要求すると共に、善良なる實業家をも要求する、亦善良なる學者をも要求する、帝國大學は實業界にも、學問界にも人材を供給すべき義務を有するのである。然るに更に社會進步の趨勢如何を顧みず、專ら官吏養成所を以て自ら任ずるならば、そは自滅の策を講じつゝあるものと評せざるを得ない。故に官立大學も私立大學と共に、社會の空氣と最も接觸して、進步發展して行くべきである。各種の學閥をして相互競爭せしめ、而かも機會均等の上に之を爲さしむるは國家繁榮の基礎を造るものである。

要するに此の後は官、公、私立の障壁を撤去して、其間に何等の區別を設けず、機會均等に、實力を以て互に競爭すると云ふ事なれば、學閥何ぞ必し

學閥大に歡迎すべし　も有害好ましからず。

も有害ならんや。余は寧ろ、斯くの如き健全なる學閥が社會の各方面に於て、多々益々多からん事を希望するものである。

學生と學校

全體からいへば社會が進歩して居るのであるから、學生も亦同時に進歩して居るに違ひない、卽ち今日の學生は或る事を知つて、他の多くの事を知らぬといふやうな事はなく、皆均一に發達して居る。それから、平素樂事とする所の趣味といふものも餘程廣く、且つ上品になつたと思ふ。之れを昔の書生に就て見れば、其日々に語る所は天下國家の事であるが、一身の行は亂暴で、暴飲暴食し、更らに一層下等なものになると白晝惡所に出入して、少しも恥辱としないものが多かつた。今日の學生には少なくとも予の見る所では、追々此陋習の跡を絕つたやうに思はれる。

又一般に社會的になつて、樂事も殖えて來た、種々の會が開かれる、且つ一種の才のあるもの、例へば畵才のあるものなら、畵を稽古して、之れを樂しむとか、音樂に嗜好を持つものは、ヴァイオリンやピアノを習つて、娛みとするとか、其外哲學的の事を愉快として居るものもあれば、倫理、宗教の會を設けて、心靈の向上發達を計つて居るものもある。

殊に運動などには餘程の興味を感じて、熱心家が多いらしく見受けられる。此等は主として現代學生の樂事であるが、此娛樂は決して惡いものではない、寧ろこれに依て如何ばかり精神の保養をなし、如何ばかり知識を開發し、如何ばかり才能を研き得るか、容易に推察し得るであろう。斯くて昔の如き、下劣なる書生の趣味は段々と姿を隱すやうになつて了つた。

予の見て居る、今日の學生社會は先づ好い傾向であるといひたい。成

程學生は非常に多く成た、從つて屑も多く成た。新聞でも、世間でも學生の墮落といへば、殊更に力を入れて喋々する。併し之れを以て直ちに現代學生社會の全體を推測するのは速斷である。予が常にいふ通り、是は、學生が墮落したのではなく、墮落者が偶ま學生になつたといふ迄である。昔でいへば、學生となる者は撰り拔きの、學問好きの優れた者、卽ち俊才に限られて居たのであるが、今日では天下の青年男女殆んど學生ならざるはなしといふ勢である、斯樣に多數の中で、惡い者の比例が多くなつて來るのは、何の不思議もないのである。

尤も今の學界の事情と雖も、無論決して完全なものではない。第一其學問の修業といふものが頗る形式的で、單に覺へるといふ事を以て、學生の能事了ると考へて居るらしいのは甚だ宜しくない。就中試驗に落第してはたまらぬといふので、自然に教育本來の意味を忘るることとなり、

加之今日では教科の數もふえて、これを一々のみこむのは容易の事でないから、勢ひ可成的早く餘計に覺へて、試驗に應じなければならぬといふ事になつて居る。卽ち器械的に覺へて、器械的に答へる。佛蘭西でいふショッファーヂである、詰め込みである、クランミングである。併し乍ら若し今日の學生に於ても、昔の學生の如くに、單に撰拔の小部分のものが學問に志したとするならば、少し計りの方法の不完全や、何かはさしたる障害とはならぬ、矢張好結果を得られるに決つて居る。現代の學海は社會の殆んどすべての人、總ての階級の人、卽ちあらゆる種類の人間を抱括して居るので、自然其苗に善惡長短の差等の甚しいのは免かれぬ、中には父親も、祖父も曾て書物など讀んだ事がないといふやうな家の悴も混じつて居るので、これに素養のある善い方の分と同じものを教へて、好結果を得ぬからとて、殊更に驚くのは頗る知慧のない話だと思ふ。

要するに玉石混淆の嫌はあるかも知れぬが、日本全體の學生を平均して進んで居るのに違ひないのである。

今日世間では能く學生の弊をいふ、成程弊はある、併し所謂世の弊なるものを以て、これを直ちに今の學生社會にあて嵌めやうとするのは誤りの甚しきものといはねばならぬ。

何時の世にても、何處の國にても、古いものから新しいものを見、老人から若いものを見れば、何かについて勝手が違つて居るので異樣に感ぜられる。然れどもこれは弊でもなければ何でもない。老人達は唯だ自分達が若い時に善いと思つた事を標準として、それを何時迄も善い事と信じ、飽く迄も立てゝ行かうとするから、若いものゝする事が氣に入らぬので、これは何も若いものゝ惡いのでなく、其實自分達の思想が停滯し、靜止し、老朽して居ることに氣が付かぬから起る結果である。尙ほ此種の人は單に老人ばかりに止まらず、世間が稱して、教育家として居る人々の間にも、なか〳〵少なからず存在して居るのである。

惟ふに日本の今日は丁度過渡の時代であるから、社會の事がおかしく見える、それも止むを得ない、譬へば立て居るのが眞正の禮儀であるか、それとも座て居るのが禮儀であるか、一寸今の所では判斷が出來ぬ、併し乍らこれを老人より見るならば、無論立て居るのは禮でないといふであらう、さりとて座て居る事が果して永久に亙つて遵奉すべき理想的の作法であるかといへば、そうもいはれぬだろう。

所謂今の弊なるものを弊として、傍から之を矯んとするは考へものである。嘗て中學生で某新聞から賞を得たといふ青年が來たから、予は其人に種々の事を話した。中學校でよく學校騷ぎといふことをやる、此はおもに學生が校長教師に反抗するとか、又は學生が校長と一緒になつて

教師の放逐運動を始めるとかてあるが、考へて見ると、此は一面自分等の無責任といふ所から來るものてある、兎に角自分學校に居る以上は、其學校の法則を犯すことは出來ぬ、一方に之を犯すものがあれば、他の一方には之を防ぐものがなければならぬ。譬へば一ッあの教師を排斥しやうといつて、その運動に取掛る學生の團體があればいやそれはいけぬ、正しい事てないから、斷然加擔せぬといつて、屹然その反對に立つといふやうな獨立精神が缺けて居ると思ふ。勿論宜しくない行爲てあるから雷同せぬといふ丈てなく、今一歩進んてこれに反抗しやうといふ勇氣がなくてはならぬ、校中て少し聲の高いものが主唱し出すと、大抵は之れに附和雷同して、惡い事だ、いやな事だと思ひ乍らも、勇氣のない結果、つい〳〵渦中に捲き入れられて了ふ。縱し捲き入れられぬにしても、退いて見て居る丈て、猛然起つて反抗の聲を揚げ得ないのてある。

勿論校長にして優秀なる、偉い人てあるなら、自然に感化力もあり、威嚴もあつて、此樣な醜事は早く既に未然に防ぐ丈の技量はあらうが、併し一旦青年達が亂軍になつて、常識も何もなく押寄て來る時には、それは何んとてかなふものてない。斯る衆力を恃んて、學校騷ぎを演ずるといふことは近頃地方での一種の流行となつて居るが、是らは今日での最も忌むべき弊てあらうと思ふ。

流行といへば、學校の側にも一種の流行がある、それは禁止といふとてある。何所の學校でも相集て議する時、その主なる議題は何てあるかと云へば、大抵は禁止問題てある、卽ちこれも弊がある、あれも危險だと、何につけ、彼につけ禁止する事ばかり考へて居て、少しても積極的に、斯樣な事を始めやう、といふ樣な計畫は全く知らざるものゝ如くてある、といふのが元來卑怯の考て、唯學校の平和が保たれればよい、生命さへ長ければよ

いといふのが、其根本思想になつて居るから、勢い消極的手段ばかり取る事となるのだ。

私の意見としては、この主義は餘り感心せぬ、素と教育の理想といふものは意氣地なしの、平凡な學生を作るのではなくして、積極的の氣力のある、有爲の青年を作る事にあるのであるから、從つてこれ等の青年を抱擁する學校は、此理想に基いて方針を定めなければならぬ。

雨が降るからといつて戸を閉ぢ、風が吹くからといつては牕を閉めるやうな事では仕方がない。世間では學校の爲に學校を建るやうだが、私共は學生の爲め、國家進歩の爲に建てゝ居るのであるから、若しこの目的に反する事蹟が顯はれたら、何の躊躇も、猶豫もなく其學校を倒して了ふ迄である。今日の學校經營の考は、昔の日本の家といふ觀念と大差なく、唯長く其家名が續て居ればよいのである、無事安穩でさへあればよいのである、如何にも狹隘な、卑怯な考だと思ふ。

官、公立學校の理想は、國全體を堅くするのが主でなければならぬ。而して若し此意見を以て正しいものとすれば、今日の入學試驗制度の如きは甚だおかしなものといはねばならぬ。全體性來才能あつて、能く出來る者は打放つて置いても、何時かは自分の力で自分を作り上るから心配はない。其代り出來ない者こそ善い學校へ入れて、充分に教育する必要がある、惡い者を善い方に感化してやる必要がある。

これが若し個人で以て學校を經營するといふのなれば、それは自分の理想とする種類の人物を撰拔いて養はうとするのも、或は面白いかも知れぬ。所が官、公立學校といふものは、國が國の金で費用を支辨して居るのであるから、より多く公共的でなければならぬ、然るにも拘はらず、其學校へ試驗上手の者ばかりを入れて、他を顧みぬとは面白くない。年々入

學志願者がふえて來るから假令へば、三千人の中て三百人丈が入學する事となると、殘餘の二千七百人は全く方針を誤る事となる、而してこれが實際に於て年々行なはれて居る事實である。

多數者の爲に少數者が犧牲となるのは止むを得ぬ事かも知れぬが、少數者の爲に多數者が犧牲となるといふに至つては、頗る慘酷な次第ではあるまいか。

私の考ては官公立學校は大道、公道のやうなものであつて、その恩惠には何人も勝手に與るとの出來るやうでなければならぬと思ふ。

圖書館の任務

圖書館の任務と云へば、無論圖書館に依つていろ〳〵違ふけれども、要するに書物を貸して、之を讀ませると云ふだけのことの樣に思はれるが、決してさう云ふ單純なものではなからうと思ふ。圖書館の經營方法に依つては、隨分大きな仕事が出來るやうに思はれる。無論學校は直接に青年を教育して居るが、圖書館に依つて大に其効を補充せらるることが出來、又社會教育も圖書館に依つて其目的を遂げることが出來ると思ふ。即ち圖書館長及び圖書館員の讀書者に對する待遇方、又は監督方が宜しきを得ると否とは、讀書以外に少なからぬ影響を及ぼすものであると思ふ。假令へは少年の讀書に就ても、圖書館は出來得べくんば成るべく良き書物を讀み、害ある書物を避けると云ふと等に注意したいと思ふ、又注意に依つて之を爲すとは無論出來る。是等は直接讀書に關係のある事であるが、全體の圖書館の平素の經營方法に依つては、種々に社會の氣風を作ることが出來ると思ふ。即ち德風の中心、德化の焦點となることは、圖書館の任務の最も高尚なるものであると考へる。圖書館である以上、無論

書物の散逸を防がねばならぬから、取締を嚴重に爲なければならぬが、併ながら之を各個人の公德、卽ち、面々の心掛に依つて爲さしむる樣に仕向け、規則の力に依つて之を勵行し、之を壓迫すると云ふ方法を避けることは最も必要なことで、各人のセルフ、レスペクト卽自尊の精神に依つて其良心に訴へて、唯規則の威力に依つて之を爲すことを避けると云ふ方針を採ることが、圖書館の最も大切な任務であらうかと予は常に考へて居る。是は圖書館ばかりでなく、社會百般の事皆是に外ならぬのであるけれども、圖書館が敎育の中心となり、德化の焦點となり、此精神に依つて社會の各個人を待遇せば、以て公德養成の功を奏すること最も速かであらうと思ふ。原來國々の氣風は各異なり、其文明の程度に差あり、其程度を等しうしても、國に依つて各其特色がある、故に無暗に規則の力を以て秩序を保たうとする國もあり、各自の自尊心に依つて秩序を保たうとする國もある、而して其及ぼす所の影響に至つては餘程强いものがある。先づ歐米でも、進んだ國になれば圖書館の平素の規律と云ふものは餘り規則的に規定せずに、能く行はれる。早く言つて見ると、書物は勝手に出して、勝手に讀んで、もとの所へ入れて置けと云ふやうなことで、少しも書物は紛失しない。のみならず秩序が亂れずに、行はれて居ると云ふ所の風を見ると、如何にも羨ましい。又手續をするにした所が誠に些細な、チョット自分の名を書きさへすれば、證書を入れるのでもなければ、何のむづかしいことをせずに、書物を自由に持つて行くことが出來る。成る程紹介の必要な場合があり、又隨分樣々の手續を爲ねばならぬともあるけれども、餘りむづかしい、窮屈な事をせずに圖書館に出入して、讀書の利益を得ると云ふことは、大切な事である。併ながら斯の如き美風を持つて居る國も、以前から其通りであつたかと云ふと、必ずしもさうでない。先づ英

國の如きは最も美風の盛んな所であるけれども、隨分古い圖書館に行つて見ると、讀書臺に鎖が着いてあるのがある。と云ふのは是れは昔は書物を貸すと云ふと、夫きり返へさなかつたりするものがあつたから、鎖に繋いで書物を勝手に持去ることの出來ないやうなことにしてあるのである。是は町の圖書館のみならず大學の圖書館にでもあることで、公德の發達を以て誇つて居る國と雖も、今を去ること百五十年乃至二百年の昔にあつては、さう云ふやうな有樣であつたので、決して初めから其公德心は發達してゐたのではなかつた。軈て是が人の自尊の精神を益々發揮せしめた結果、規則に依らず、監督に依らず、唯だ各人の德性に訴へて、之を爲して行くことが出來るやうになつて來たと言はなければならぬ。

又國に依つては何でも規則の力に依つてやつて居るものもある、水撒が水を撒くのも、何時に水を撒くと極めたならば、雨が降つても矢張り水を撒いて居る、唯々規則の力で之を維持して居る。もう一歩進むと露西亞の如きは、隨分杓子定規に規則づくめの事が多く行はれて居る。

予も先年露西亞に行つた事があるが、是は自分が見た事でなく、ソレスと云ふ人の露西亞と云ふ本に書いてある話であるが。露西亞では何でも規則づくめで、少しもセルフ、レスペクトに訴へて秩序を保ち、規則を行はしむると云ふことがない。一例を擧ぐれば聖彼得堡の宮殿の側にネバーと云ふ川がある。其川は冬になると、スッカリ凍つて了ふ所から、自由に人の通行が出來る。橇に乘つて渡ることも出來れば、歩いて渡ることも出來る。其處を十月一日より四月三十日まで通行を許し、其時期以外は許さないことになつて居る、夫は暖くなると氷が解け初めるから是は危險である、又凍り切らない時に渡つても危險であるからであつて、行政監督上至當な注意である。所が例へば四月の三十日の午後六時に此川を止

める。其川の止まる時間の五分前に人がやつて來る。さうするとまだ時間があるから通行を許す。通行者は一向平氣で其處を渡つて行く。向ふに着く時分には最早六時三分になつて居る、もう時が過ぎたからいけない、據なく戻つて來て元へ歸らうと思ふと、是ももう時が過ぎたからいけない。そこで其通行人は彼方へ行き、此方へ行く中に氷が解けて、溺れて死んで了つたと云ふ話がある、是は事實であるかどうか知らぬが、さう云ふ例が書いてある。原來何故に斯の如き規則を極めたかと云へば人命を重んじ、人の溺死を防ぐが爲めに設けた規則である。然るに杓子定規に其規則を厲行する結果、人を殺すと云ふやうなことになつては死法となつて仕舞ふ、畢竟目的を忘れて手段に重きを置き、卽ち手段と目的を顚倒して了つた一例である。斯の如き笑話は世間に隨分多い。而して何故に斯の如き事をしなければならぬかと云ふと、卽ち自尊の精神の缺乏であつて、此自尊の心を養成せずして、唯々規則に依つて人を取締つて行かうと云ふ結果、斯う云ふ事になつて來るのである。斯の如き事をして居れば何時まで經つても自尊の發達は出來ない。圖書館の如きは此精神を養ふのには最も好き場所である、之を社會的に行へば公德となり、一個人の上に行へば私德となる。公德私德は唯々便宜の爲めの區別である、要するに人の道德を養ふ所以である。卽ち人の德義を養ふ溫室になつて、初めて圖書館の效は全きを得たものと言はなければならぬ。それにはいろ〳〵な手段方法があるだらうと思ふ。予は曾て南葵文庫で明治天皇御卽位五十年には貴重品陳列所を建てるか、美術館を造るが宜しからうと云ふことを話したことがあるが、全國から集つて來て居つた圖書館の從事者等も、全體圖書館と博物館と云ふ者を必ずしも區別する必要はない、或圖書館に或物品を陳列すると云ふやうなことにして、地方の

小都市と云ふやうな所では、隨分圖書館にして而して陳列館を兼ねると云ふことが宜しからうと云ふ話が出た。私も至極同感で、殊に書物の中には唯々讀むよりも陳列品として見て面白いのみならず、隨分人々に感化を及すとの出來る書物もありはしないかと思ふ。例へば此書物はフランクリンが讀んだ、此書物は中江藤樹が讀んだと云ふことの話がある と云ふやうな風に、偉人若くは人傑が讀み、又は其書物の爲めに得た種々の結果を書いたり、何かしたものが各所の圖書館に幾らもありはしないかと思ふ。昔のウエーランドの經濟書と云ふものは、今日から見ると簡易なものであるが、其ウエーランドの經濟書の中でも又小經濟書と云ふ、やうな子供の讀むやうなものを初めて讀んで、夫れ切り讀書を止めて、商業を始めたと云ふやうな人が現にある。又昔佛蘭西でロガリズムの法を改革しやうとした時に、政府は之れを其の當時の有名な數學者に託した。所が其學者はどうしても方法が付かないものだから、圖書館へ行つて、何か好い方法はないかと思惑して居る中、まるで數學の對數表などに關係の無い書物で、其時に出版されたアダム、スミスの富國論を偶然に開くと、其内に分業論があつた。其分業論を讀むと、針を造るには十八人の手數を要して造るとあるので、其學者は直に其本を閉めて了つて、直ぐにロガリック、テーブルを造る方法を考へた。それはどう考へたかと云ふと、最初に單式を造る爲めに第一流の數學者四五人もあれば宜い。而して其式を解くが爲めに第二流の數學者の二十人も備へば宜い。それから後は八十人で各個三錢か五錢も與ふれば出來ると云ふ考へであつた。所が之れを最初は、どう考へても非常に澤山な學者を備つて、かつ自分の一生の仕事としても尙やり切れないと思つた。所が分業と云ふことを案出した爲に直ぐ出來た。是等は卽ち圖書館の効と云ふよりも、寧ろ其人